平成 30 年度

ジェンダー問題 調査・研究支援事業
報告書

SNS 時代におけるオリンピック報道
～選手のダイバーシティはいかに表象されたか～

北九州市立男女共同参画センター ムーブ

発行に寄せて

北九州市立男女共同参画センター・ムーブは、平成7年7月の開所以来、男女共同参画社会の形成の推進と理解を深めることをめざし、様々な事業を展開して参りました。

平成9年度から実施している「ジェンダー問題調査・研究支援事業」は、男女共同参画社会形成の障害となっている問題をジェンダーの視点から掘り起し、問題解決に取り組む市民グループや研究者を公募し、調査・研究費の一部を助成・支援するもので、今回で22回目を迎えます。公募する調査・研究テーマは、「第3次北九州市男女共同参画基本計画」（平成26年2月策定）に基づいた自由課題を設定しました。

今年度は、「SNS時代におけるオリンピック報道～選手のダイバーシティはいかに表象されたか～」というテーマで調査・研究を行う研究者に対して支援を行いました。

現代のオリンピック報道の課題は、マス・メディアを通してだけではなく、選手自らが発信する情報に触れることが出来るようになったSNS時代において、私たち視聴者や選手が情報を受け取るだけでなく、マス・メディアとどう関わっていくかということだと考えます。

そこで今回の研究では、リオオリンピックのテレビニュースの内容分析や日本代表選手とテレビニュース制作者へのインタビュー調査を通して、リオオリンピック報道に選手のダイバーシティがどのように提示されたかを明らかにし、テレビニュース制作者、視聴者、選手の三者による新しいコミュニケーションの在り方について提言を行いました。

この調査報告書が、2020年東京オリンピックの開催を控える日本において、個人のメディア・リテラシーの向上の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査・研究報告書の発行にあたり、ご協力いただきました皆さまに厚く御礼申し上げます。

平成31年3月

北九州市立男女共同参画センター・ムーブ

所　長　　柴　田　邦　江

SNS時代におけるオリンピック報道
～選手のダイバーシティはいかに表象されたか～
報告書

研究代表：小林直美（山形大学・助教）

目　　次

報告書概要 …… 1

第1章　はじめに …… 5
1　問題の背景 …… 5
2　リオオリンピックの概要と日本代表選手 …… 7

第2章　調査・研究目的と方法 …… 9
1　調査・研究目的 …… 9
2　調査研究方法と対象期間 …… 9

第3章　調査結果 …… 15
1　テレビニュース内容分析結果 …… 15
2　インタビュー調査結果 …… 26

第4章　まとめ …… 32
1　結果と考察 …… 32
2　提　言 …… 36

報　告　書　概　要

■調査・研究題目

SNS時代におけるオリンピック報道～選手のダイバーシティはいかに表象されたか～

■調査・研究代表者名

小林　直美（山形大学　学術研究院　助教）

■調査・研究目的

誰もが情報を発信することができるSNS時代のテレビニュースにおいて、①リオオリンピック開催期間中、選手のジェンダーや国籍がどのように報じられていたかその傾向を明らかにし、②テレビニュース制作者やオリンピック日本代表選手へのインタビュー調査からテレビニュースの背景や選手のSNSによる情報発信について理解する。

これらを通じ、SNS時代における日本のオリンピック報道における選手のダイバーシティがどのように提示されたかを明らかにし、2020年に開催される東京オリンピックを前に、視聴者のメディア・リテラシー向上に寄与する資料とする。

■調査・研究方法

公共放送と民間放送のテレビニュースにおいて、選手のダイバーシティに関する報道内容を調査するために、公共放送であるNHKの『ニュースウオッチ9』と民間放送である日本テレビの『NEWS ZERO』の内容分析（ニュースの本数、分野、発生地、選手の性別、国籍、プライバシー、呼称、容姿、感情・表情）を行った。また、テレビニュースの背景を理解するために、制作者及びリオオリンピック日本代表選手に対しインタビュー調査を行った。

■結果と考察

⑴　本調査の結果から得られた知見

①『ニュースウオッチ9』と『NEWS ZERO』は番組全体として報道スタイルや重点的に取り上げるニュースの分野が異なるが、「スポーツ」を最も多く取り上げ（46.4%、40.9%）、日本で発生したニュースが6割（66.5%、63.6%）、ブラジルが約3割（28.3%、27.8%）という傾向は2番組で一致していた。

②オリンピックの競技結果等のニュースは、総ニュース本数の約3割（33.3%）を占め、そのうち女性選手の報道回数は45.6%、男性選手は53.6%であった。

③オリンピックの競技結果等のニュースにおいて、日本人選手の報道が約9割（89.6%）を占め、外国人選手の報道は約1割（10.5%）であった。

④日本人選手がメダルを獲得した競技の報道が多く、1本のニュースとして取り上げられない競技が12競技にのぼった。

⑤正式名称以外の呼称は、男女ともに注目度の高い強豪選手につけられやすく、女性選手の呼称の特徴は「○○ちゃん」等、複数の選手に対する子ども扱いがみられ、男性選手の呼称は選手個人の実績や技量に由来する呼称が多かった。

⑥選手のプライバシーは「過去や未来」、「監督・コーチ」等選手の競技背景がわかる項目について男女同程度言及されるが、それ以外の項目において女性選手は「親・兄弟姉妹」、男性選手は幅広い関係者が取り上げられる傾向にあった。

⑦選手の容姿については「美しさ」よりも「力強さ」の表現が多く、女性選手の方が「力強さ」（女性62.0%、男性38.0%）について言及されることが多かった。
⑧選手の感情・表情は「喜び」（n=245）や「気迫」（n=112）について男女ともに多く取り上げられ、女性選手は「悲しみ」（73.3%）等のどちらかといえばネガティブな感情・表情を取り上げられることが多く、男性選手は「喜び」（72.7%）について多く取り上げられていた。
⑨テレビニュース制作者は、日本人がメダルを獲得するとニュースで取り上げるということで方針が一致していた。
⑩テレビニュースの放送順に大きな影響を与える要素は、その日の競技結果であった。その他には競技や選手の注目度や選手の出演の有無、制作者の考えによってニュースの放送順が決定されていた。
⑪テレビニュースにおいて、選手の性別によって異なる扱いはしないと制作者たちは述べた。
⑫選手のSNSによる情報発信は日本オリンピック委員会や所属団体、スポンサー等によって推奨されていた。
⑬選手はSNSを目的に応じて使い分けていた。

⑵ 新しい発見

①セクシュアル・マイノリティの選手は全く取り上げられなかったが、「難民選手団」「ファベーラ出身のブラジル代表選手」「オリンピックボランティア」等、リオオリンピックのダイバーシティの一端を示す存在をテレビニュース制作者たちは取り上げた。
②日本のリオ現地取材班は、安全確保のために取材先を制限された。
③マス・メディアは、選手の思いや事実を正確に汲みとって伝えるのではなく、あらかじめストーリーを作り、それを報道する場合があると選手は感じていた。
④マス・メディアは競技結果に応じた選手の取り上げ方をするわけではないと選手は感じていた。
⑤女性が競技をするイメージがない競技で活躍する女性選手は、マス・メディアに取り上げられやすいと選手は感じていた。
⑥選手がSNSによる情報発信に慎重になる要因として、自らの意図と異なる情報や誤った情報を報道された経験、SNSで批判的コメントを受けた経験が影響していた。

⑶ 考察

⑴ ⑵ を踏まえ、以下4点についての考察を行った。

①報道回数（「ニュースの分野②」）におけるジェンダーと国籍

女性選手（45.6%）よりも男性選手（53.6%）の方が多く取り上げられ、セクシュアル・マイノリティの選手の報道は0回であった。報道された選手の国籍をみてみると、約9割（89.6%）が日本人選手（女性40.3%、男性49.0%）で占められ、外国人選手の報道は約1割（10.5%）であった。

報道回数は日本代表選手の性別構成比（図1）と同じ傾向を示した。選手の国籍は日本人で席巻されておりオリンピックニュースは日本人選手の結果報道に終始したといえよう。また、セクシュアル・マイノリティの選手は全く取り上げられておらず、リオオリンピックが「性的指向」の多様性を目指した大会であるということがテレビニュースから伝わることはなかった。

②競技結果の報道からみるジェンダー

日本代表選手がメダルを獲得した競技が報道される傾向にある。ゆえに『ニュースウオッチ9』及び『NEWS ZERO』のリオオリンピックニュースは「メダル至上主義」（稲垣 2016：17）であるといえよう。

しかし、男女ともに順位に比して金メダリストよりも多く取り上げられた競技と選手が存在する。これらの選手はプロ競技で人気が高いものもあれば、活躍を期待されながら敗れた選手、予想外の活躍があった競技もあり、複数の要因によってニュースに多く取り上げられたと思われる。また、ニュースの制作者は取り上げる選手に対して視聴者が興味を持つように、選手の背景（ライバル関係やプライバシー）を含めたニュース制作を行っている。しかしながらそこにメディアが作る「感動」の準備（森田 2016：30-31）がないか、選手の性的魅力を取り上げた内容かどうか批判的に捉える必要がある。そして、メダル獲得がなかったために周辺化され、不可視化された競技や選手が存在する。

③ニュースに描かれる選手のジェンダー

選手の正式名称以外の「呼称」「プライバシー」「容姿」「感情・表情」は、男女共通して取り上げられるものと、ジェンダーによって取り上げられる内容に異なりがあることが明らかとなった。女性選手の呼称については「○○ちゃん」という子ども扱いされる選手が複数みられ、この点についてはジェンダー・バイアスがいまだ強固に残っているといえよう。

また、今回の結果を質的に分析し、男性のまなざしによって女性の性的魅力に価値をおき、人々の興味・関心を引くような報道でないか、さらに今日的には、男性選手に対しても同様の報道がないか検証が必要である。

④SNS時代のテレビニュースとオリンピック代表選手

日本代表選手は、JOCや所属団体からSNSによる情報発信を推奨されている。しかし、インタビュー調査によって選手が情報発信に慎重になる要因が明らかとなった。それは自らの意図と異なる情報や誤った情報を報道された経験や、SNSで批判的コメントを受けた経験があったからだ。ゆえに、選手はSNSを利用して自分の言葉で意見を表明することが必要である、と考えている選手もいた。調査対象となった選手はマス・メディアによる報道のメリット・デメリットを理解しており、特にマス・メディアによって選手の活躍が報じられ、ファンが増え、それによって選手が支えられていることを理解していた。だからこそマス・メディアと選手の良い関係が重要だと捉えていた。

テレビニュースの制作者は、リオオリンピック当時は現在ほどインターネット報道の担当や部局が整備されておらず人手も足りなかったと述べている。現在はSNSのオリジナルコンテンツも増え、スポーツ報道とSNSの連携も発展している。ゆえに視聴者は、今後新しいオリンピックニュースに接する可能性がある。

■東京オリンピックに向けての提言

(1) テレビニュースの視聴者へ

テレビニュースはすべて構成されたものである。ゆえにオリンピックの現実そのものを反映しているのではなく、制作者の方針や取捨選択、さまざまな制約を反映している。また、テレビニュースはものの考え方（イデオロギー）や価値観を伝えている。選手のジェンダー、性的指向、国籍・出身、人種や民族の描き方、日本人のメダル獲得を至上とする報道方針もその1つである。

このような状況をふまえ、視聴者は、オリンピックを楽しむために主体的かつ批判的にテレビニュースを視聴することが重要であると思われる。視聴者が、オリンピック選手自らが発信する情報も含めた幅広い情報の発信・受信・収集を行うことにより、視聴者、選手、テレビニュースの三者による新しいコミュニケーションにつながるだろう。

(2) テレビニュース制作者へ

報道する競技や内容にジェンダーや性的指向に対する差別や偏見、ステレオタイプを助長するようなものがないか常に考えなければならないだろう。また、報道する内容の「偏り」を意識すると同時に、国籍に関わらず素晴らしい結果を残した選手の活躍や、オリンピックに関係するさまざまなニュースを取り上げ、オリンピックを多角的視点から報道する必要があると思われる。

さらに、SNSを活用しスポーツとニュースの新たな連携を考え、視聴者に多角的視点から多様な情報を伝えることにより、新たなオリンピックニュースを切り拓くことにつながるであろう。

(3) オリンピック選手へ

オリンピックに参加する時は、自らが参加する競技の素晴らしさや楽しさ、競技への思いをSNSで発信することも視野に入れる必要があると思われる。選手自らが発信する情報はマス・メディアが取り上げない情報を補完し、新たなコミュニケーションを創り出すことになるだろう。

第１章　はじめに

1　問題の背景

オリンピックは、世界中の人々がスポーツと平和の祭典を、メディアを介して楽しむことができるメディアスポーツ最大のイベントの1つである。そのようなオリンピックでは、以下のようにあらゆる差別を禁じ、選手の権利と自由を保障している。

> オリンピック憲章　オリンピズムの根本原則
> 「このオリンピック憲章の定める権利および自由は人種、肌の色、性別、性的指向、言語、宗教、政治的またはその他の意見、国あるいは社会的な出身、財産、出自やその他の身分などの理由による、いかなる種類の差別も受けることなく、確実に享受されなければならない」（国際オリンピック委員会　2018：11）。

今日、近代オリンピックは女性選手の競技への参加と参加者数という点で、平等に近づきつつある。しかしながら、それらの活躍を取り上げる日本のテレビニュースには、ジェンダー・バイアスが残っている（小林 2017a）。ジェンダー（gender）とは、生物学的な男女（雌雄）の違いを意味する「性」（sex）に対し、社会・文化において形成される性差（gender）を指し、1960年代後半からの第2波フェミニズムにより生まれた概念である。このジェンダーという概念によって、これまで「自然かつ普遍」とされてきた人の性別を男女に二分する性別二元性への問い直しが行われ、医学的に人間の身体すべてが男女で単純に二分されるわけではないことが明らかとなった。また、性別二元性が内包する、人を男女に二分し不平等に扱うことを正当化する問題や、性的に多様な人々を社会から排除する問題を指摘してきた（熊安 2018：4）。

そして1980年代以降、ジェンダー概念が学術分野に持ち込まれ、それまで客観的で中立的とされてきた学問が、男性視点で行われてきたことを明らかにした。さらに、ジェンダー概念はメディア研究、スポーツ研究にも大きな貢献を果たし、どちらの領域も男性に支配されてきたという男性中心主義を暴いてきた（熊安 2018：4-5）。

また、今日的にはジェンダーやセックスと関連する用語として「セクシャリティ（sexuality）」に注目が集まっている。「セクシャリティ」は、包括的には性に関わるすべての現象を意味するが、本報告書では「性的指向」という狭義の意味で用いる。「性的指向」とは、性愛の対象が、自分と同性であるのか、異性であるのか、どちらでもないのかという性的関心の方向を表す。たとえばスポーツの領域では、異性愛を前提とし男性同性愛者を排除することによって成り立つホモソーシャルな領域であることを明らかにした（熊安 2018：4-5）。メディア研究においては、いわゆる「おネエ」キャラの男性同性愛者を笑いの対象とする一方で、マッチョ系の男性同性愛者、女性同性愛者や女性から男性になったトランスジェンダーの存在を不可視化する構造への疑問が提示され（福井 2017：13-15）、「セクシャリティ」の中でもセクシュアル・マイノリティ（性的少数者またはLGBTともいう）の人々の存在が明らかになった。

本研究は、スポーツとメディアが交差するオリンピックニュースを対象とし、ジェンダーの視点から分析を行う。オリンピックを研究対象とした日本のジェンダーとメディ

ア研究は、男性選手とは異なる扱いを女性選手が報道量や文脈において受けてきたこと、女性選手は年齢や容姿に注目され、性の対象とする報道や実力のある選手を矮小化して取り上げていることを明らかにしてきた[1)]。

そのような中、2014年12月オリンピック憲章に「性的指向による差別禁止」が加えられ、2016年に開催された第31回リオデジャネイロオリンピック（以下リオオリンピックと略す）の開会式のテーマを毎日新聞はこう評した。「自然、ダイバーシティ（多様性）、喜び。多民族国家ブラジルを象徴する演出が随所に見られた。先住民、ブラジルに到達したポルトガル人、アフリカからの奴隷、中東やアジアからの移民――そうした人々が融合してきた多様性の歴史を表現した」（『毎日新聞』2016.8.8）。また、ブラジル選手団の入場を先導したのはトランスジェンダーの世界的スーパーモデルとして有名なLea T（リア・T）であった。

同時に、私たちのメディア環境は激変している。かつて情報は新聞・テレビ・雑誌・ラジオ等のマス・メディアの「送り手」から、私たち「受け手」への一方通行であった。しかし1990年代にインターネットが普及し、私たちはPCを使ってインターネットにアクセスし、さまざまな情報を収集するだけでなく、ブログや動画共有サイト、Twitter、Facebook、Instagram等のソーシャル・ネットワーク・サービス（以下、SNS：social networking service）を利用して自ら情報を発信することができるようになった。

そして現在、スマートフォンの登場によって、SNSを通じ私たちはより簡単に、素早く、世界に向けて情報発信することができるようになった。それはオリンピック選手の情報行動も変容させ、選手がSNSを通じ自らの情報を発信し、その内容がマス・メディアにも取り上げられるようになった。これまでマス・メディアによって「報道される側」であった選手は、情報の「送り手」となり、私たちは選手自らが発信する情報に接触し、選手と直接交流することができるようになった。

このようなニュースを取り巻くメディア環境が大きく変わったことについて伊藤は、「『受け手の変容』『伝え手の変容』『コンテンツの変容』の3つが絡みあっている」と指摘している。たとえば選手がSNSで情報発信し、それをマス・メディアが伝え、それがポータルサイトのトップページに掲載されて広く伝わり、識者がブログで問題を考察する、というのは「伝え手の変容」である。「受け手の変容」は、誰もが情報の受発信を活発に行うようになったことで、受け手のメディアに対する信頼感やとらえ方も変わってきている。こうしたなかで「コンテンツの変容」が起き、「ニコニコ生放送」や「Ustream」のような動画の生中継、Twitterによる実況中継、デジタルの特性を生かしたデジタル・ジャーナリズムの取り組みも一部の報道機関などでは始められている。他方、取材をしないでネットの書き込みやテレビ番組などの放送内容によって書かれた記事も目立つようになった（伊藤 2015：70-72）。

このように、オリンピックにおいて選手のダイバーシティが重視され、選手自らが発信する情報に接触できるSNS時代のオリンピックニュースは、選手のダイバーシティをどのように報道したのだろうか。本研究は以上のような問題意識を持ち、日本で放送されているテレビニュースの内容分析と、テレビニュース制作者とオリンピック選手のインタビュー調査を実施した。

２　リオオリンピックの概要と日本代表選手

本節では、リオオリンピックの概要と、日本代表選手の参加者数とメダル獲得数について述べる。

(1) リオオリンピック概要

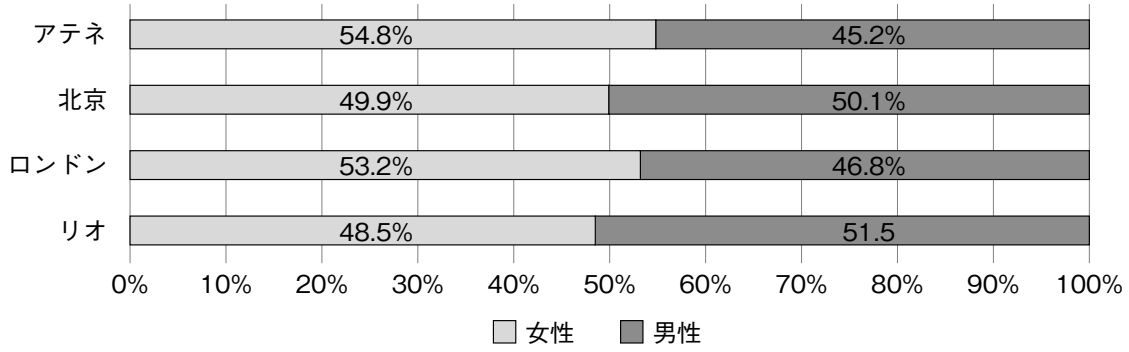
リオオリンピックは、ブラジルでサンパウロに次ぐ人口と経済規模を誇り、国内第1位の観光都市であるリオデジャネイロを主会場として2016年8月5日～8月21日の17日間開催された。ブラジル国内､南アメリカ大陸でオリンピックが開催されるのは、初めてのことであった。リオオリンピックには、206の国と地域から約11,000人が参加し、28競技306種目が行われた。

本研究のテーマである「ダイバーシティ」からリオオリンピックの特徴をあげると4点に集約することができる。1つ目は女性選手の参加が過去最高の45%に達したこと。2つ目は国際オリンピック委員会(以下､IOC:International Olympic Comittee)が、内戦などにより発生した各国難民による「難民選手団」を結成し、その出場を認めたこと。3つ目の特徴は、今大会でトランスジェンダー選手の性別変更に関する基準を緩和して､性的適合手術を受けなくても出場を認めたこと。4つ目の特徴は､セクシュアル･マイノリティであることを表明する選手が史上最高の50名以上にのぼった(『ハフィントンポスト』2016.11.24)ことである。つまり､リオオリンピックではダイバーシティの中でも性別、国籍、出身やセクシュアル・マイノリティが尊重された大会であったといえよう。次項では、日本のリオオリンピック報道を考える上で前提となる日本代表選手の概要と、メダル獲得数についてジェンダーの視点からまとめる。

(2) リオオリンピック日本代表選手の概要と競技結果

図1は、オリンピックに参加した日本代表選手を性別により分類したものである。リオオリンピックに参加した日本代表選手は女性選手164人（48.5%)、男性選手174人（51.5%）であり、アテネ以降のオリンピックでは女性選手の参加割合は最も少ない大会であった。

図1：アテネオリンピック以降の日本代表の選手（性別）



出典）日本オリンピック委員会ホームページの各オリンピック選手団の選手数より筆者が作成（小林2017b）

表1は、リオオリンピックで日本代表選手が史上最多メダル数41個を獲得した内訳を示したものである。性別でメダル獲得数をみてみると、女性選手は18個（43.9%）、男性選手が23個（56.1%）獲得しており、男性選手の方が多かった。メダル獲得数の多い種目は柔道12個（金3、銀1、銅8）、水泳9個（金2、銀2、銅5）、レスリング7個（金4、銀3）であった。次章では本調査の研究目的について述べる。

表1：リオオリンピック日本代表選手のメダル獲得数

メダル	女性	男性	計
金メダル	7（58.3%）	5（41.7%）	12（100.0%）
銀メダル	1（12.5%）	7（87.5%）	8（100.0%）
銅メダル	10（47.6%）	11（52.4%）	21（100.0%）
合　計	18（43.9%）	23（56.1%）	41（100.0%）

出典）日本オリンピック委員会ホームページ「日本代表選手団メダリスト・入賞者一覧」より筆者が作成

第2章　調査・研究目的と方法

1　調査・研究目的

本研究の目的は、第1にリオオリンピック開催中の報道における選手のジェンダーや国籍の取り上げられ方、及びセクシュアル・マイノリティがどのように報じられていたか分析を行い、その傾向を明らかにすることである。

第2に、テレビニュース制作者やオリンピック代表選手へのインタビュー調査を実施し、テレビニュースの制作体制や、オリンピック開催時のジェンダーや国籍、セクシュアル・マイノリティの取り上げ方や報道方針（SNS含む）についてインタビューを行い、ニュース番組の分析結果に加味して考察を行う。

これらを通じ、SNS時代における日本のオリンピック報道の背景（情報の送り手及び取材する側、される側）の理解やニュースにおいて選手のダイバーシティがどのように描かれたか明らかにする。

2　調査研究方法と対象期間

上述した研究目的を達成するために、本研究では、①テレビニュース内容分析と②テレビニュース制作者及びリオオリンピックに参加した日本代表選手へのインタビュー調査を実施する。

(1) テレビニュース内容分析

分析対象は日本のキー局の夜のニュース番組である日本放送協会（以下、NHK）の『ニュースウオッチ9』(以下､『NW9』と略す）と日本テレビ放送網（以下､NTV）『NEWS ZERO』（以下、『ZERO』と略す）である[2)]。

表2：リオオリンピック内容分析対象番組

放送局名	番組名（略称）	放送時間（分）	放送日
NHK	『ニュースウオッチ９』（『NW9』）	21:00 ～ 22:00（60 分）	月曜～金曜
NTV	『NEWS ZERO』（『ZERO』）	23:00 ～ 23:59（59 分） 23:30 ～ 24:30（60 分）	月曜～木曜 金曜

分析期間はオリンピック開始4日前の2016年8月1日からオリンピック終了4日後の8月25日までである。リオオリンピック開催期間中の報道傾向を把握するために、調査対象番組が放送したすべてのニュースを分析対象として量的分析を行った。

今回の調査では、国際テレビニュース研究会考案によるテレビニュース内容分析の手法を原則として用いたが（中・日吉・小林 2015b)、内容分析基礎項目やジェンダー分析項目（小林2017a）は今回の調査用に追加・修正して行った[3)]。このため分析結果が一致しないことがある。分析項目は表3のとおりである。具体的には、各番組で放送されたすべてのニュースを放送順に分類し、分類したニュース毎に表3に示した合計19項目についてコーディングを行った。以下に分析基礎項目について説明を行う。

表3：リオオリンピック　テレビニュース分析項目

内容分析基礎項目（9 項目）	ジェンダー分析項目（10 項目）
a 日付、b 放送局コード、c 分／秒、d ニュース時間、e タイトルテロップ／サブタイトルテロップ、f ニュースの発生地、g ニュースの分野①、h ニュースの分野②、i 備考	a 選手の名前、b 性別、c 国籍、d 競技結果、e 選手のプライバシー、f 選手の容姿、g 選手の感情・表情、h 選手のジェンダー、i 選手の呼称、j 選手の性的対象化

①内容分析基礎項目

a．日付：分析する番組の日付を入力する項目

b．放送局コード：分析する番組のコードを入力する項目

c．分／秒：分析対象となるニュースの開始時間と終了時間を入力する項目

d．ニュース時間：

1 本のニュースの開始／終了時間の「分／秒」と、ニュースの途中で放送されたコマーシャルの時間を計測し、当該ニュースが放送された時間を表す項目[4)]

表4：ニュースの発生地

コード	関係地域
1　自国	日本
2　ブラジル	オリンピック開催国
3　アジア	日本、中東、ロシアを除くアジア諸国と地域
4　北米	米国、カナダ
5　中東	アラブ諸国
6　欧州	ヨーロッパ、ロシアを含む
7　中南米	ブラジルを除くメキシコ以南の米大陸
8　アフリカ	アフリカ大陸
9　大洋州	オーストラリア、ニュージーランド等
10　その他の地域	北極、南極、領海に属さない洋上・海底、宇宙空間、国際（世界）等

表5：ニュースの分野①

コード	関係分野
100 政治	政策、選挙、外交、議会、国際機関、その他政治
200 経済	景気・失業、金融市場、貿易、消費、流通、労働、税金、その他経済
300 社会	犯罪、事件･事故、イベント（人為的）、災害、社会現象、裁判、教育、デモ、その他社会
400 軍事	紛争・戦争（テロリズム含む）、兵器、軍事基地、自衛隊、安全保障、その他軍事
500 環境	環境汚染・破壊、環境保護、環境運動、その他環境
600 運輸 / 通信	航空、船舶、自動車、鉄道、その他運輸、通信技術、通信サービス、放送サービス、その他運輸・通信（放送含む）
700 科学 / 技術 / 文化 / 芸術	新技術、宇宙、医療、発見・発明、その他科学・技術、音楽、映画、演劇、その他文化・芸術
800 歳時 / 気候	暦・祭・年中行事、気候（季節）、天気予報、その他歳事・気候
900 スポーツ	リオオリンピック競技、その他スポーツ
999 オープニング等	オープニング、クロージング等

e．タイトルテロップ／サブタイトルテロップ：
1本のニュースの見出し（タイトルテロップ）小見出し（サブタイトルテロップ）を入力する項目
f．ニュースの発生地（「発生地①」「発生地②」「発生地以外の言及地」）：
当該ニュースが発生した地域や国を入力する項目
g．ニュースの分野①：ニュースの分野を分類する項目
h．ニュースの分野②：
リオオリンピック実施競技および競技以外のオリンピック関係ニュースを分類する項目
i．備考：
コーディングで判断に迷った場合や、ニュース内容に不明な点があった場合、入力する項目。

表6：ニュースの分野②

コード	
901　開閉会式	918　自転車
902　その他	919　卓球
903　ミックス	920　馬術
904　陸上競技	921　フェンシング
905　水泳	922　柔道
906　サッカー	923　ソフトボール
907　テニス	924　バドミントン
908　ボート	925　射撃
909　ホッケー	926　近代五種
910　ボクシング	927　カヌー
911　バレーボール・ビーチバレー	928　アーチェリー
912　体操（新体操・トランポリン）	929　野球
913　バスケットボール	930　トライアスロン
914　レスリング	931　テコンドー
915　セーリング	932　ラグビーフットボール
916　ウエイトリフティング	933　ゴルフ
917　ハンドボール	

②ジェンダー分析項目

a．選手の名前：
オリンピックニュースで取り上げられた選手の名前、またはチーム名等（例：サッカー男子日本代表）を入力する項目
b．選手の性別：オリンピックニュースで取り上げられた選手の性別を入力する項目
c．選手の国籍：
オリンピックニュースで取り上げられた選手、またはチーム等の国籍を入力する項目
d．選手のスポーツ種目：
オリンピックニュースで取り上げられた選手、またはチームのスポーツ種目を入力する項目（表6参照）
e．選手の競技結果：
オリンピックニュースで取り上げられた（名前、性別や国籍を入力した同じ）選手、またはチーム等の競技結果を入力する項目
f．選手のプライバシー：
オリンピックニュースで取り上げられた選手等のプライバシーに関する言及の有無を入力する項目

表7：選手の性別

コード	対象者
1　男性	男性選手
2　女性	女性選手
3　セクシュアル・マイノリティ	LGBT 等のセクシュアル・マイノリティであることを公表している選手
4　混合	男性、女性、セクシュアル・マイノリティが集団として上げられていた場合に入力するコード
5　不明	選手の性別を調べても不明な場合に入力するコード

表8：選手のプライバシー

コード	プライバシーの内容
1　過去・未来	選手自身の過去や未来について
2　性格	選手の性格について
3　恋愛	選手の恋愛／恋人
4　結婚	選手の結婚
5　夫・妻	選手の家庭／家族等（夫・妻について）
6　子ども	選手の家庭／家族等（子どもについて）
7　親・兄弟姉妹	選手の家庭／家族等（親・兄弟姉妹について）
8　同僚	選手の仕事／同僚について
9　友人	選手の友人について
10　恩師	選手の恩師について
11　コーチ・監督	選手のコーチ・監督
12　その他	その他

g．選手の容姿：
当該ニュース内容や映像で主たる報道対象の選手の容姿（人の姿や形、身なりと顔形のこと）への言及・発言があった場合、その選手の名前（フルネーム）と発言者の名前（フルネーム)、発言内容を入力する項目

表9：選手の容姿

コード	対象者
1　美しさ	選手の姿形、身なりや顔形について美しい、かっこいい、かわいいなどポジティブな表現
2　力強さ	選手の姿形、身なりや顔形、スポーツする身体への賞賛。またはスポーツする身体について力強さやスピード、攻撃性に対するポジティブな表現
3　その他	「1」「2」にあてはまらない表現や、容姿に対するネガティブな表現等

h．選手の表情・感情：
当該ニュース内容や映像で主たる報道対象の選手の表情や感情への言及・発言があった場合、その選手の名前と発言者の名前、発言内容をすべて記入する項目。また、当該選手の容姿について何で触れられたか、【発言】【ナレーション】【テロップ】【映像】に分類し入力する項目

i．選手のジェンダー言及：
ニュースの中で選手のジェンダーについて言及された場合、その選手の名前と発言者の名前、発言内容をすべて記入する項目

j．セクシュアル・マイノリティの選手への言及：
ニュースの中でセクシュアル・マイノリティの選手について言及された場合、その選手の名前と発言者の名前、発言内容をすべて記入する項目

表10：選手の表情・感情

	プライバシーの内容
1　喜び	選手の笑顔、笑顔、幸福、楽しい、幸せそうな表情など
2　悲しみ	選手の悲しみ、泣く、つらそうな表情など
3　怒り	選手の怒り、悔しそうな表情など
4　リラックス	選手の普段とかわらない様子、落ち着いているなどの様子
5　気迫	選手の闘志みなぎる様、情熱や気迫、やる気に満ちた表情
6　緊張	選手が緊張した様子
7　その他	

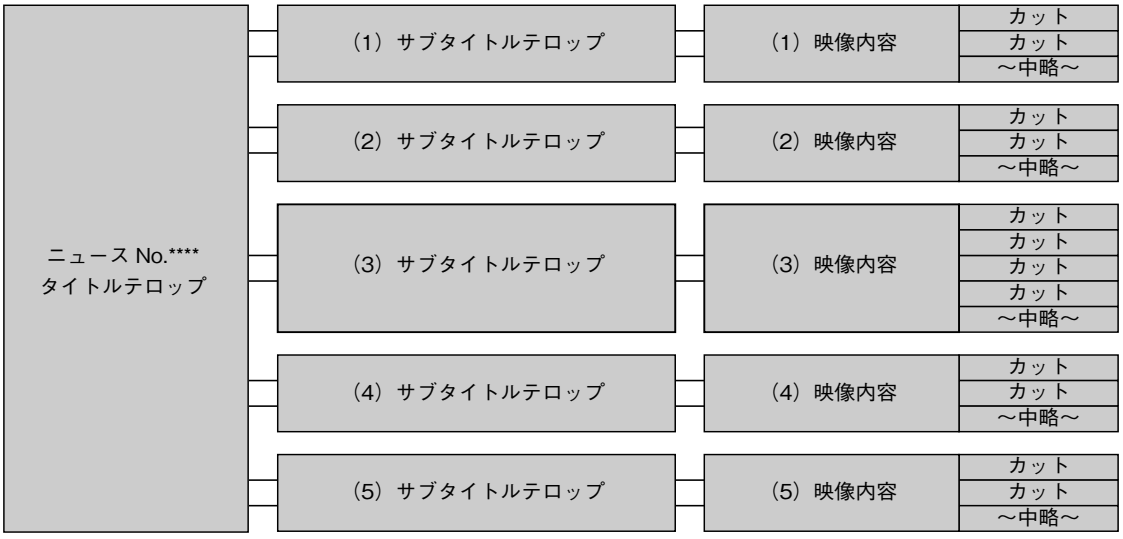
k．選手の呼称：
ニュースの中で選手を正式名称以外で呼ばれた場合、その呼称と選手の名前、発言者の名前を記入する項目

l．選手の性的対象化：
ニュースの中で選手を性の対象として扱った場合、その選手の名前と発言者の名前、発言内容をすべて入力する項目

ニュース番組で放送される「ニュース本数」の数え方を図2に示した。「ニュースNo.****」を1本のニュースとした時、ニュースの初めに「タイトルテロップ」が提示され、5つの「サブタイトルテロップ」とそれに付随する5つの「映像内容」を含んだ「1本」のニュースとしてカウントされる。今回の内容分析ではこのようにニュースを数え、その単位を「ニュース本数」とする。

ジェンダー分析項目についての単位は「報道回数」である。「報道回数」とは、上述した1本のニュースの中で主人公として取り上げられた「選手」を数えたものである。ただし、1本のニュースで複数のオリンピック競技結果が取り上げられた場合は、それぞれの競技結果でもっとも焦点が当たった「選手」または「チーム」を最大10名までコーディングした。

図2：ニュース1本ごとの成り立ち



出典）中・日吉・小林 2015a

コーディングは、筆者が所属する大学の学生2人をコーダーとして採用し、1人につき1番組を担当した。2人のコーダーは本調査に先立つ北京オリンピック・ロンドンオリンピックのジェンダー・コーディングの経験者である。コーディング・マニュアルに基づき十分に訓練を積んだ後、コーディングを行った。また、コーディング終了後、すべてのデータを報告者がコーダーと共に確認し、コーディングにおける考え方や分析視点を統一し、データの信頼性向上に努めた。

(2) インタビュー調査

【調査対象】

①リオオリンピックテレビニュース制作者（ディレクター3名（女性1名、男性2名））

②リオオリンピック参加選手（3名（女性1名、男性2名））

【調査方法】

①対面式インタビューまたは電話によるインタビュー

②スノーボールサンプリング[5)]

③調査期間　平成30年11月13日～平成31年2月13日

④質問項目

調査対象者のジェンダーやダイバーシティへの理解度、あるいはテレビニュースの担当によって質問内容を追加・変更することができる半構造化インタビューを実施した。

インタビューの質問項目は、同じ質問を行う基本質問項目と、テレビニュース制作者向け質問とオリンピック選手向けの個別質問項目をそれぞれ設けた。インタビュー調査の質問項目の概要は表11のとおりである。詳細については資料3、4を参照されたい。

表11：インタビュー調査質問項目概要

	テレビニュース制作者	リオオリンピック参加選手
基本質問項目	・属性（名前、年齢、所属） ・SNS等メディア利用について	・属性（名前、年齢、所属） ・SNS等メディア利用について
個別質問項目	・キャリアについて ・ニュース制作等について ・オリンピック報道とジェンダーについて	・競技歴について ・オリンピック報道とジェンダーについて ・マス・メディアの報道に期待すること

⑤山形大学倫理審査委員会（11月12日付承認）

本調査実施にあたり、山形大学倫理審査委員会の審査を受けた上で実施した。調査対象者の権利の尊重と保護のため、事前にインタビュー目的と内容、発表方法等について説明を行い、承諾を得た上でインタビューを行った（資料1、2）。また、本報告では調査対象者が特定されないよう、インタビュー内容を引用する際は仮名とし、所属や競技名は記載しない。

第3章　調査結果

1　テレビニュース内容分析結果

本節では、テレビニュースの内容分析結果について述べる。図・表において、百分率で示している場合があるが、必ずしも合計が100.0％にならないことがある。

(1) ニュース本数

表12は『NW9』（343本）と『ZERO』（351本）が分析期間中に提供した総ニュース本数と総ニュース時間及びそれぞれの合計と平均を示したものである。同じ60分番組であるが、『ZERO』は分析期間中に同番組の時間帯にリオオリンピックの試合中継があったため放送が3日少ない。そこでニュース時間をニュース本数で割り、ニュース1本あたりの平均ニュース時間を求めたところ、『NW9』は202.1秒／本、『ZERO』は128.7秒／本であった。『NW9』の方が『ZERO』よりも1本あたりのニュースが長い傾向にある。

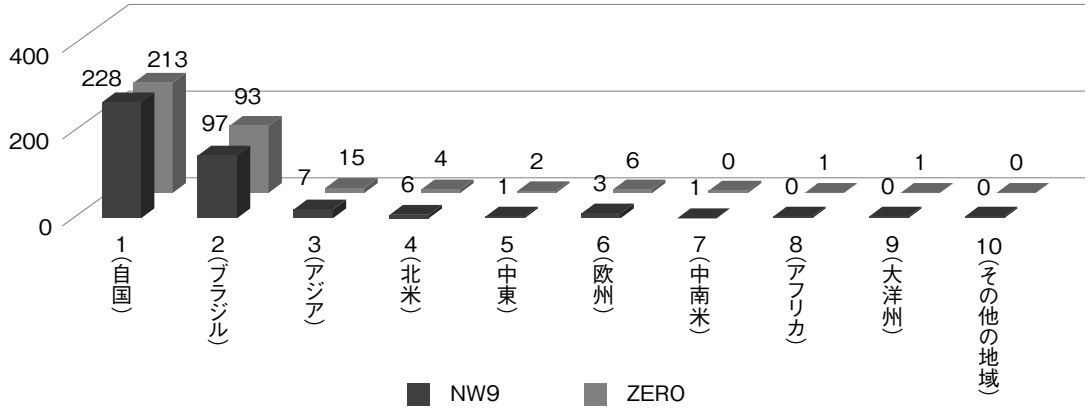
表12：分析日数と報道量

	分析日数	ニュース本数	ニュース時間	平均ニュース時間
『NW9』	19 日	343 本	69,320 秒	202.1 秒／本
『ZERO』	16 日	351 本	45,159 秒	128.7 秒／本
合計	35 日	694 本	114,479 秒	
平均	17.5 日	347 本	57,239.5 秒	165.0 秒／本

(2) ニュースの発生地①

図3は「ニュースの発生地①」の各番組のニュース本数をグラフで示したものである。もっとも多く報道されたのは「1　自国」で計441本、全体の65.0%を占めた。次に多く報道されたのは「2　ブラジル」で計190本、全体の28.0%と約3割がブラジルをニュースの発生地とするニュースであった。1位と2位の合計は93.0%となり、オリンピック開催期間中の9割を超えるニュースが日本とブラジルを発生地とするニュースであった。番組毎にみてみると、『NW9』は「1 自国」66.5%「2　ブラジル」28.3%であった。『ZERO』は「1　自国」63.6%、「2　ブラジル」27.8%であり、「ニュースの発生地①」の2番組の報道傾向はほぼ一致している。

図3：ニュースの発生地①　単位：ニュース本数



(3) ニュースの分野①

「ニュースの分野①」の各番組のニュース本数を示したものが表13である。2番組を合計してもっとも多く報道されたのは「900　スポーツ」で43.6%を占めていた。次に多く取り上げられていたのは「300　社会」で、27.1%であった。それ以外の分野は10%に満たなかった。

各番組の傾向を見てみると、『ZERO』は「900　スポーツ」(40.9%)、「300　社会」(35.6%)とこの2分野で7割強を占めている。一方『NW9』は、「900　スポーツ」(46.4%)、「300　社会」(16.9%)の2分野で約6割を占めた。また、「800　歳時／気候」(14.9%)、「100　政治」(12.8%)はそれぞれ『ZERO』の2倍以上報道されていた。

以上から、オリンピック開催期間中の報道分野の傾向として、「スポーツ」(43.6%)と「社会」(27.1%)ニュースが1位2位を占め、この2分野で約7割を占める。番組毎の特徴として『NW9』は『ZERO』よりも「スポーツ」「歳時／気候」「政治」に力を入れており、『ZERO』は「社会」ニュースを『NW9』の2倍報じている。

表13：ニュースの分野①

単位：ニュース本数

	100 政治	200 経済	300 社会	400 軍事	500 環境	600 運輸／通信	700 科学／技術／文化／芸術	800 歳時／気候	900 スポーツ	総計
『NW9』	44	9	58	15	1	2	4	51	159	343
	12.8%	2.6%	16.9%	4.4%	0.3%	0.6%	1.2%	14.9%	46.4%	100.1%
『ZERO』	21	14	121	6	1	7	14	17	139	340
	6.2%	4.1%	35.6%	1.8%	0.3%	2.1%	4.1%	5.0%	40.9%	100.1%
2番組合計	65	23	185	21	2	9	18	62	298	683
2番組平均	32.5	11.5	92.5	10.5	1.0	4.5	9.0	31.0	149.0	341.5
2番組割合	9.5%	3.4%	27.1%	3.1%	0.3%	1.3%	2.6%	9.1%	43.6%	100.0%

(4) ニュースの発生地①×ニュースの分野①のクロス集計結果

それでは調査期間中、ニュースの発生した場所と、そのニュースの分野はどのような傾向があったのだろうか。表14は、「ニュースの発生地①」と「ニュースの分野①」をクロス集計した結果を示したものである。もっとも多く取り上げられたのは、発生地「2　ブラジル」に分類された「900　スポーツ」ニュース（182本）であり、全体に占める割合は27.0%、ブラジルで発生したニュースの96.8%を占めた。「900　スポーツ」以外の「2　ブラジル」のニュースは188本中わずか6本であり、その内訳は「300　社会」(5本)、「200　経済」(1本）であった。次いで多く取り上げられたのは発生地「1　自国」に分類された「300　社会」ニュース（156本）であり、全体に占める割合は23.1%であった。第3位は発生地「1　自国」に分類された「900　スポーツ」ニュース（102本）で、全体に占める割合は15.1%であった。

以上から、オリンピック開催期間中のニュースはブラジルをニュースの発生地とするスポーツニュースが約3割（27.0%）を占め1位であったこと、2位は日本の社会ニュースで23.1%、3位は日本のスポーツニュースで15.1%であったことが明らかとなった。

表14：ニュースの発生地①×ニュースの分野①

単位：ニュース本数

	100 政治	200 経済	300 社会	400 軍事	500 環境	600 運輸/通信	700 科学/技術/文化/芸術	800 歳時/気候	900 スポーツ	総計
1 自国	59	20	156	13	2	9	16	62	102	439
2 ブラジル	0	1	5	0	0	0	0	0	182	188
3 アジア	4	1	12	5	0	0	0	0	0	22
4 北米	1	1	2	1	0	0	1	0	4	10
5 中東	0	0	1	2	0	0	0	0	0	3
6 欧州	1	0	5	0	0	0	1	0	2	9
7 中南米	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
8 アフリカ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
9 大洋州	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
合計	65	23	183	21	2	9	18	62	291	674
割合	9.6%	3.4%	27.2%	3.1%	0.3%	1.3%	2.7%	9.2%	43.2%	100.0%

（2番組合計）

(5) ニュースの分野②

各番組でもっとも多く報道された「900　スポーツ」の中で、オリンピックに関係するニュースはどれくらい取り上げられたのだろうか。その結果を示したものが表15である。

「900　スポーツ」（291本）のうち、リオオリンピック関連のスポーツニュースとして「ニュースの分野②」に分類されたのは231本、79.4%であった。その他のニュースはプロ野球の試合結果や高校野球（甲子園）の試合結果が多かった。ちなみに「ニュースの分野②」が分析期間の総ニュース本数に占める割合は33.3%にのぼる。

「ニュースの分野②」の2番組合計のニュース本数トップ5を見てみると、1位「902（その他）」（16.5%）、2位「903（ミックス）」（13.4%）、3位「905（水泳）」（12.1%）、4位「919（卓球）」（8.7%）、5位「912（体操）」（7.4%）であった。全体傾向として、オリンピックの競技結果以外の関連ニュースである「902（その他）」や、複数の競技結果を連続して取り上げる「903（ミックス）」が多いこと、メダル獲得競技種目のニュースが多く取り上げられる傾向が明らかとなった。一方、1本のニュースとして全く取り上げられなかった項目は12項目（「908（ボート）」「909（ホッケー）」「910（ボクシング）」「915（セーリング）」「917（ハンドボール）」「918（自転車）」「920（馬術）」「925（射撃）」「926（近代5種）」「930（トライアスロン）」「931（931テコンドー）」「933（ゴルフ）」）にのぼった。

番組別にみてみると、『NW9』は1位「903（ミックス）」（22.1%）、2位「905（水泳）」（12.4%）、3位「914（レスリング）」（8.8%）、4位「919（卓球）」（8.0%）、「922（柔道）」（8.0%）であった。『NW9』で「903（ミックス）」が多い理由は、オリンピック特集コーナー冒頭に、複数の競技結果を取り上げるニュースが多かったためである。

『ZERO』は1位「902（その他）」（26.3%）、2位「905（水泳）」（11.9%）、3位「919（卓球）」（9.3%）、4位「912（体操）」（8.5%）5位「922（柔道）」（5.9%）であった。「902（その他）」が『ZERO』で多かった理由は、「このあとの主な注目競技」という翌日試合のある競技を紹介するコーナーが6回、その他予告が3回含まれているからである。

それ以外は日本代表選手のオリンピック村の入村式の様子や帰国してからの報告会の様子等がこの項目に含まれている。

2番組に共通していたのはメダル獲得数が多い「水泳」「卓球」「柔道」が多く報道されていたことである。しかし、番組ごとに多く取り上げる競技、報道スタイルが番組ごとに異なることが明らかとなった。

表15：ニュースの分野②

単位：ニュース本数

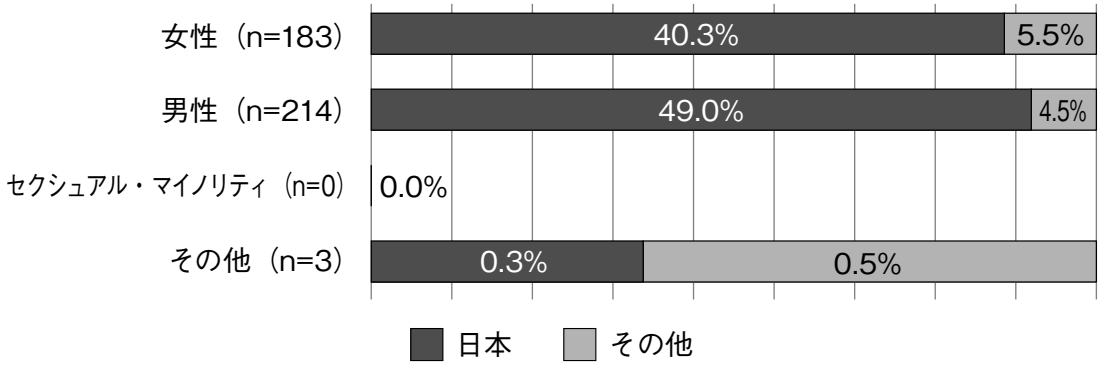
	『NW9』	『ZER0』	計（本）	割合（%）	備考
901（開閉会式）	2	2	4	1.7%	
902（その他）	7	31	38	16.5%	
903（ミックス）	25	6	31	13.4%	
904（陸上競技）	8	6	14	6.1%	
905（水泳）	14	14	28	12.1%	
906（サッカー）	6	3	9	3.9%	
907（テニス）	3	4	7	3.0%	
908（ボート）	0	0	0	0.0%	
909（ホッケー）	0	0	0	0.0%	
910（ボクシング）	0	0	0	0.0%	
911（バレーボール・ビーチバレー）	2	1	3	1.3%	
912（体操 ）	7	10	17	7.4%	
913（バスケットボール）	0	4	4	1.7%	
914（レスリング）	10	6	16	6.9%	
915（セーリング）	0	0	0	0.0%	
916（ウエイトリフティング）	1	2	3	1.3%	
917（ハンドボール）	0	0	0	0.0%	
918（自転車）	0	0	0	0.0%	
919（卓球）	9	11	20	8.7%	
920（馬術）	0	0	0	0.0%	
921（フェンシング）	1	0	1	0.4%	
922（柔道）	9	7	16	6.9%	
923（ソフトボール）					除外項目
924（バドミントン）	5	6	11	4.8%	
925（射撃）	0	0	0	0.0%	
926（近代五種）	0	0	0	0.0%	
927（カヌー）	1	0	1	0.4%	
928（アーチェリー）	0	1	1	0.4%	
929（野球）					除外項目
930（トライアスロン）	0	0	0	0.0%	
931（テコンドー）	0	0	0	0.0%	
932（ラグビーフットボール）	3	4	7	3.0%	
933（ゴルフ）	0	0	0	0.0%	
総計	113	118	231	99.9%	

(6) 選手の「性別」と「国籍」のクロス集計結果

「ニュースの分野②」に分類されたニュースで取り上げられた選手の「性別」と「国籍」毎に報道回数を2番組で合計したものが図4である。リオオリンピック開催期間中のニュースでは、全体の約9割（89.6%）が日本人選手の報道で占められ、そのうち日本の男性選手が196回（49.0%）、次いで日本の女性選手が161回（40.3%）であった。日本以外の選手は合計で40回（10.5%）（女性選手22回（5.5%）、男性選手18回（4.5%）、混合2回（0.5%））、セクシュアル・マイノリティの選手の報道は国籍を問わず0回であった。

図4：選手の「性別」×「国籍」

単位：報道回数



（2 番組合計）

(7) 報道された「競技」と「性別」のクロス集計の結果

表16は、オリンピック競技（「ニュースの分野②」）の報道回数と、当該ニュースで取り上げられた選手の「性別」を百分率で示したものである。全体的傾向として女性選手45.7%、男性選手53.5%で、セクシュアル・マイノリティの選手は0.0%であった。

報道の多い競技トップ5をみてみると、女性選手1位は「ミックス」（13.5%）、2位「バドミントン」（5.8%）3位「水泳」（5.0%）「レスリング」（5.0%）、5位「卓球」（4.8%）であった。男性選手1位は「ミックス」（15.0%）、2位「水泳」（6.0%）、3位「体操」（5.8%）、4位「陸上」（5.5%）、5位「柔道」（4.5%）であった。今回、複数の競技結果を続けて取り上げたニュースは1つのニュースとして分類したため男女双方で「ミックス」が多くなったが、「ミックス」以外は、日本人のメダル獲得競技が報道回数上位を占めていることが明らかとなった。

表16：「ニュースの分野②」×「性別」

競技名	女性	男性	セクシュアル・マイノリティ	混合	計	日本のメダル獲得数	
						女性	男性
901（開閉会式）	0.8%	1.3%	0.0%	0.0%	2.0%		
902（その他）	3.8%	3.8%	0.0%	0.8%	8.3%		
903（ミックス）	13.5%	15.0%	0.0%	0.0%	28.6%		
904（陸上競技）	1.0%	5.5%	0.0%	0.0%	6.5%		銀1、銅1
905（水泳）	5.0%	6.0%	0.0%	0.0%	11.0%	金1、銅3	金1、銀2、銅2
906（サッカー）	0.0%	3.0%	0.0%	0.0%	3.0%		
907（テニス）	0.0%	2.0%	0.0%	0.0%	2.0%		銅1
908（ボート）	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
909（ホッケー）	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
910（ボクシング）	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
911（バレーボール）	0.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.8%		
912（体操）	0.8%	5.8%	0.0%	0.0%	6.5%		金2、銅1
913（バスケットボール）	0.8%	0.3%	0.0%	0.0%	1.0%		
914（レスリング）	5.0%	1.0%	0.0%	0.0%	6.0%	金4、銀1	銀2
915（セーリング）	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
916(ウエイトリフティング)	0.5%	0.3%	0.0%	0.0%	0.8%	銅1	
917（ハンドボール）	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
918（自転車）	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
919（卓球）	4.8%	3.3%	0.0%	0.0%	8.0%	銅1	銀1、銅1
920（馬術）	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
921（フェンシング）	0.0%	0.3%	0.0%	0.0%	0.3%		
922（柔道）	3.0%	4.5%	0.0%	0.0%	7.5%	金1、銅4	金2、銀1、銅4
923（バドミントン）	5.8%	0.0%	0.0%	0.0%	5.8%	金1、銅1	
925（射撃）	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
926（近代五種）	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
927（カヌー）	0.0%	0.3%	0.0%	0.0%	0.3%		銅1
928（アーチェリー）	0.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.3%		
930（トライアスロン）	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
931（テコンドー）	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
932（ラグビー）	0.0%	1.5%	0.0%	0.0%	1.5%		
933（ゴルフ）	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
合計	45.6%	53.6%	0.0%	0.8%	100.0%	金7、銀1、銅10	金5、銀7、銅11

（2番組合計）

しかし、メダルを獲得した競技であっても報道回数に違いがあることも明らかとなった。たとえば銅メダル1個のみを獲得した競技に注目してみると「カヌー」（羽根田卓也0.3%）、「ウエイトリフティング」（三宅宏美0.5%）、「テニス」（錦織圭2.0%）、「卓球」（女子団体4.8%）の順で報道回数に差があった。

(8) 報道回数トップ10と「性別」のクロス集計結果

図5、6は、報道回数トップ10を選手の「性別」で示したものである。女性選手は全員メダリストで占められ、そのうち金メダリストは「伊調馨」「田知本遥」「金藤理絵」「高橋礼華」「松友美佐紀」選手であった。男性選手は金メダリストの「萩野公介」選手を筆頭に、「内村航平」、「ベイカー茉秋」、「白井健三」の4選手、その他メダリスト4選手、メダル獲得のない「7人制ラグビー男子日本代表」「サッカー男子日本代表」で報道回数トップ10が占められた。報道回数トップ10のみの報道回数は女性選手83回、男性選手96回で男性選手の方が多く報道されていた。その他の特徴として、男女とも全員が日本人であったことがあげられる。

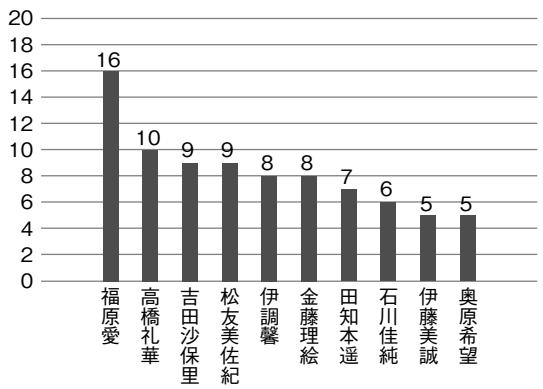
メダル獲得のない「7人制ラグビー男子日本代表」は、初戦で強豪のニュージーランドを破り歴史的大勝利と評され、続くフランス戦も勝利し、メダル獲得が期待されたため報道回数8位になったことが推測される。「サッカー男子日本代表」は、プロスポーツとして人気がある競技であり元々注目度が高いことから8位に入ったと思われる。

女性選手の金メダリスト以外の5人の内訳をみてみると、卓球3選手（「福原愛」「石川佳純」「伊藤美誠」）、バドミントン1選手（「奥原希望」）で、レスリング1選手（「吉田沙保里」）であった。男性選手トップ10の銀・銅メダリストをみてみると、「水谷隼」選手はシングルスで日本人男女初のメダルを獲得し、男子団体でも銀メダルを獲得した。「錦織圭」選手はプロテニスプレイヤーであり、元々注目度が高い上に銅メダルを獲得した。「瀬戸大也」選手は、400m個人メドレーで1位となった萩野公介選手と一緒に出場し、銅メダルを獲得した。「ケンブリッジ飛鳥」選手は男子100mと男子4×100mリレーに出場し、リレーで銀メダルを獲得した。

以上を勘案すると、「卓球」の女性選手3名（「福原愛」「石川佳純」「伊藤美誠」）と、「バドミントン」の「奥原希望」選手、「陸上競技」の「ケンブリッジ飛鳥」選手は、メダル獲得数と順位を考慮すると報道量が比較的多いといえよう。

図5：女性選手の報道回数トップ10

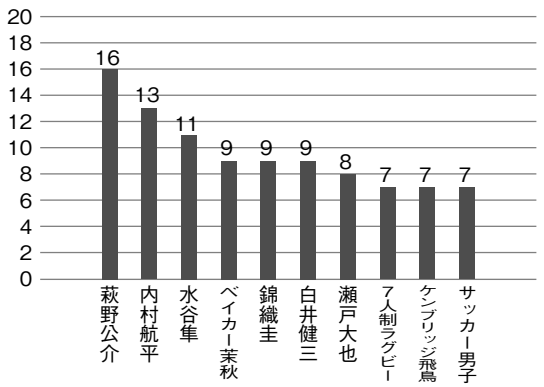
（単位：報道回数）



（2番組合計）

図6：男性選手の報道回数トップ10

（単位：報道回数）

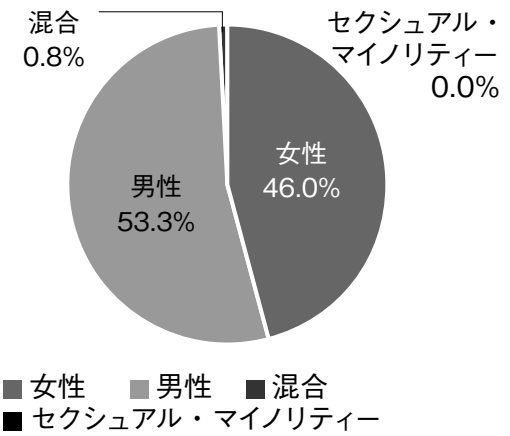


（2番組合計）

(9)「呼称」と「選手名」のクロス集計結果

図7はニュース内の【映像】【発言】【テロップ】【ナレーション】で提示された選手やチームに対する正式名称以外の「呼称」について「性別」毎に百分率でまとめた結果である。女性選手は46.0%（182回）、男性選手は53.3%（211回）と男性選手の方が愛称等で多く呼ばれていたことが明らかとなった。また、セクシュアル・マイノリティの選手への言及はなかった。

図7：「呼称」×「選手名」
（単位：報道回数）



（2番組合計）

表17は女性選手のトップ5を示したものである。第1の特徴は、すべて日本人メダリストで占められていることである。卓球とバドミントンの選手で1位3位4位を占めていることが第2の特徴である。また第3の特徴としてオリンピックに連続出場している強豪選手が多い。福原選手は北京から3大会、吉田選手はアテネから4大会、石川選手、松本選手はロンドン、リオの2大会連続出場しており、全員がメダル獲得者である。つまり、注目度が高い強豪選手が正式名称以外の「呼称」で呼ばれる傾向にある。第5の特徴は、「○○ちゃん」等の子ども扱いがみられること。第6の特徴は格闘系競技に出場する女性選手の呼称が「霊長類最強」（吉田選手）、「野獣」（松本選手）等の動物にたとえられることである。

表17：「呼称」×「選手名」（女性選手）

順位	選手名	呼称	回数
1位	福原愛（卓球）	泣き虫 / 愛ちゃん 最年長としてキャプテンとして キャプテン福原	14
2位	吉田沙保里（レスリング）	絶対女王 霊長類最強 沙保里 HERO さおちゃん	13
3位	バドミントンダブルス女子日本代表 高橋礼華・松友美佐紀	タカマツ（ペア）	7
4位	石川佳純（卓球）	愛ちゃん2世 エース石川（佳純） 卓球3姉妹の二女 佳純ちゃん	7
5位	松本薫（柔道）	野獣	5

（2番組合計）

表18は男性選手のトップ5をまとめたものである。第一に競泳のマイケル・フェルプス選手が日本人以外で唯一トップ5入りしている。フェルプス選手はシドニーオリンピックから5大会連続出場し、個人・団体で金メダル23個、銀メダル3個、銅メダル2個の合計28個のメダルを獲得している世界一の競泳選手である。また内村選手は北京から3大会連続出場し、個人総合2連覇を含む合計7個（金メダル3個、銀メダル4個）のメダルを獲得している。白井選手もオリンピック前の競技結果から注目度の高い選手であった。また、「王者」「エース」「チャンピオン」「“史上最速”」「（水の）怪物」等選手個人の実績や技量にちなんだ「呼称」が目立つ。また内村選手のみ「航ちゃん」と呼ばれており、子ども扱いが認められた。

上記から、男性選手の「呼称」の特徴は、第1に注目度の高い強豪選手が愛称をつけられやすいこと、第2に選手個人の実績や技量に由来する「呼称」が多いといえよう。

表18：「呼称」×「選手名」（男性選手）

順位	選手名	呼称	回数
1位	マイケル・フェルプス	（水の）怪物 憧れのヒーロー 王者	13
2位	内村航平	航平さん 航ちゃん 夫 王者	10
3位	白井健三	ひねり王子 びびり王子 世界チャンピオン 王者 航平さんの後継者	8
4位	水谷隼	エース水谷 日本男子のエース（水谷） 大きなエース エース	8
5位	陸上400ｍリレー 男子日本代表	日本の侍たち "史上最速"の4人 史上最強	5

（2番組合計）

（10）選手の「プライバシー」と「性別」のクロス集計結果

図8は選手の「プライバシー」についてニュース内で言及された内容を項目ごとに「性別」でクロス集計したものである。全体として選手の「過去や未来」(n=81)「性格」(n=41)「その他」（n=49）への言及が多く、選手の関係者への言及は少なく、「恋愛」への言及は全くなかった。また、セクシュアル・マイノリティ、混合への言及はなかった。

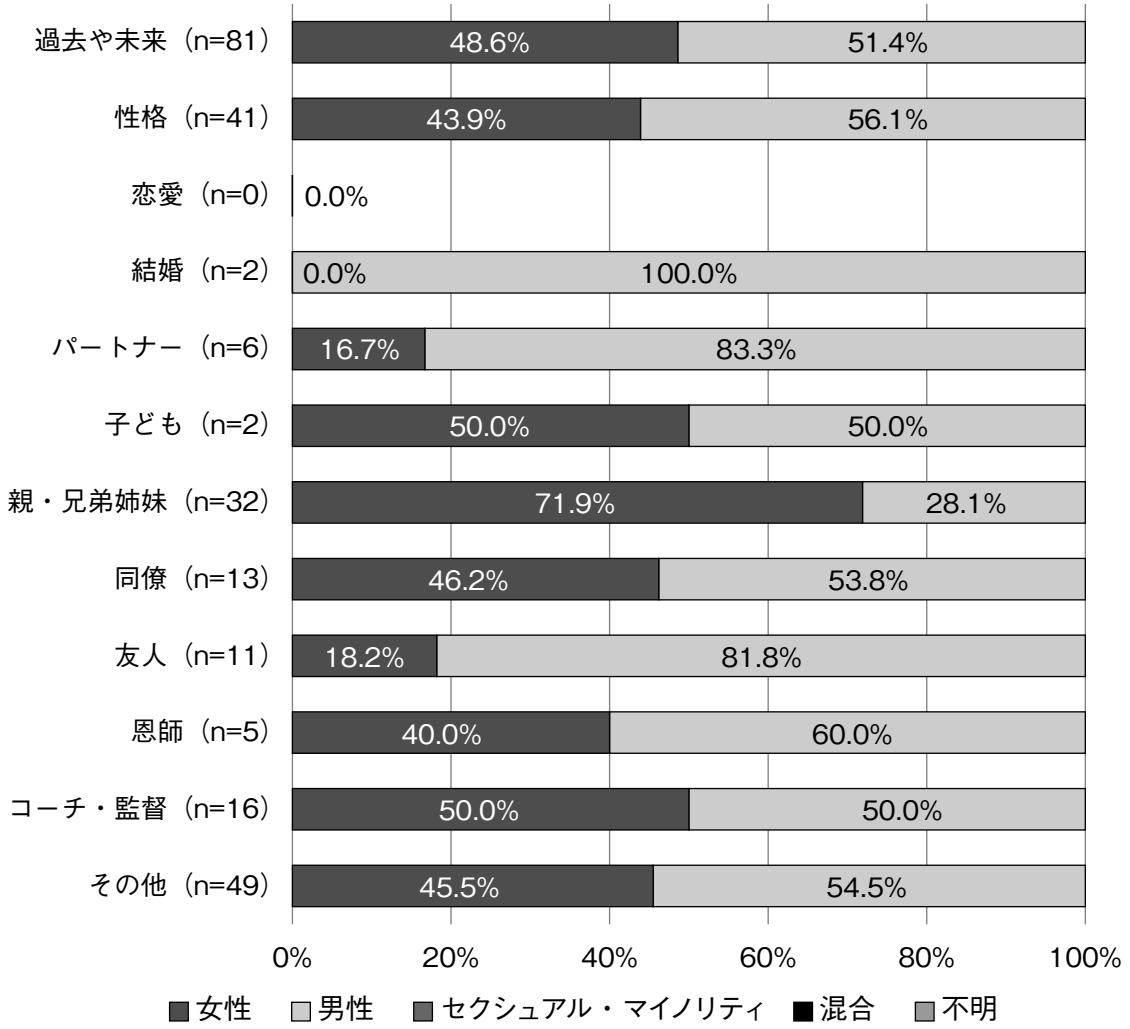
男女同程度取り上げられた「プライバシー」は、「過去や未来」(女性48.6%、男性51.4%)、「子ども」(女性50.0%、男性50.0%)、「コーチ・監督」(女性50.0%、男性50.0%）である。女性選手の方が取り上げられることが多い項目は「親・兄弟姉妹」(71.9%)、男性選手の方が取り上げられることが多い項目は「結婚」(100.0%)、「パートナー」(83.3%)、「友人」(81.8%)、「恩師」(60.0%)、「性格」(56.1%)、「その他」(54.5%)、「同僚」(53.8%）であった。ただし、

「過去や未来」以外の項目はサンプル数が少ないため、質的分析が必要である。

以上から、選手の「プライバシー」は、「過去や未来」、「監督・コーチ」等選手の背景がわかる項目について男女同程度言及されるが、女性選手は「親・兄弟姉妹」、男性選手は幅広い関係者が多く取り上げられる傾向にある。

図8：選手の「プライバシー」×「性別」

単位：報道回数



（2 番組合計）

（11）選手の「容姿」と「性別」のクロス集計結果

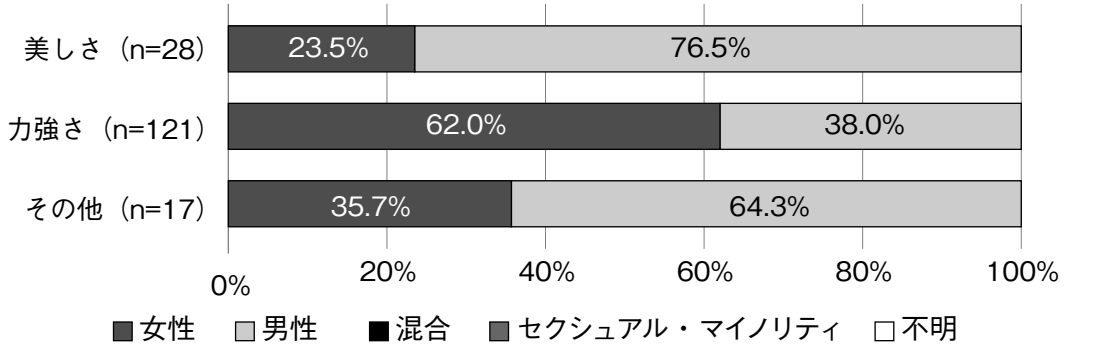
図9は選手の「美しさ」「力強さ」「その他」に代表される「容姿」についてニュース内の【映像】【発言】【テロップ】【ナレーション】で提示された内容を項目ごとに「性別」でクロス集計した結果を百分率で示したものである。全体傾向として各選手の「美しさ」（n=28）についての提示は少なく、「力強さ」（n=121）の方が多く「混合」「セクシュアル・マイノリティ」への言及はなかった。

各項目をみていくと「美しさ」については【発言】（n=11）で言及されることが多く、男性選手の方が76.5%と多く取り上げられていた。「力強さ」については特に【ナレーション】（n=58）で提示されることが多く、次いで【発言】（n=28）【映像】（n=25）で提示されていた。また、「力強さ」は女性選手が62.0%と多く取り上げられていた。

上記から、「容姿」については「美しさ」よりも「力強さ」の表現が多く、女性選手が多く取り上げられる傾向が明らかとなった。

図9：選手の「容姿」×「性別」

単位：ニュース本数



（2 番組合計）

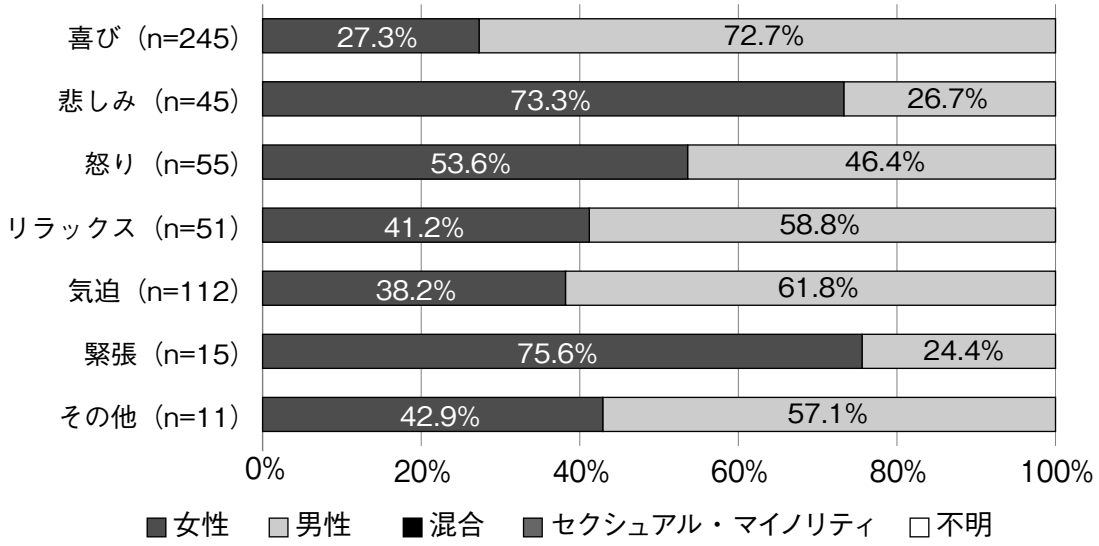
（12）選手の「感情・表情」と「性別」のクロス集計結果

図10は選手の「喜び」「悲しみ」、「気迫」「緊張」等の「感情・表情」についてニュース内の【映像】【発言】【テロップ】【ナレーション】で提示された内容を項目ごとに「性別」でクロス集計した結果を百分率で示したものである。全体傾向として選手の「喜び」（n=245）や「気迫」（n=112）をニュースで取り上げることが多いことが明らかとなった。

「性別」でみてみると、セクシュアル・マイノリティを取り上げることはなく、女性選手は「悲しみ」（73.3%）、「緊張」（75.6%）、「怒り」（53.6%）とどちらかといえばネガティブな「感情・表情」をニュースで取り上げられることが多い。男性選手は「喜び」（72.7%）、「気迫」（61.8%）、「リラックス」（58.8%）について女性選手よりも多く提示されていた。ただし、「喜び」「気迫」以外の項目はサンプル数が少ないため、女性選手はネガティブな表情を取り上げられることが多いと断定することは早急である。

図10：選手の「感情・表情」×「性別」

単位：報道回数



（2 番組合計）

2　インタビュー調査結果

本節ではリオオリンピック報道に従事したテレビニュース制作者とリオオリンピックに出場した選手に対するインタビューのまとめを行う。テレビニュース制作者に対しては、オリンピックニュースの報道方針、放送順位、ニュース制作・取材体制、ジェンダーやダイバーシティに関する考えと選手の取り扱い、SNSの活用等について概観する。

リオオリンピックに参加した選手については、SNS等による情報発信、性別によるメディアの取り上げ方の相違について感じたこと、今後、マス・メディアの報道に期待すること等について概観する。

(1) テレビニュース制作者

インタビューを行ったのはリオオリンピック当時30代であったディレクター３人（A氏（男性)、B氏（男性)、C氏（女性））である。所属や担当番組、詳しいキャリア等についてはプライバシー保護の観点から記載できないが、全員リオオリンピック報道に携わった関係者である。

①リオオリンピック報道方針について

報道方針について、A氏とB氏は「日本の競技優先」「日本人がメダルを取ったら最優先」と述べた。

②放送順位

競技が始まると日本人の競技結果を中心に報道し、日本人が金メダルを獲得したら番組の冒頭で取り上げることが多いということは共通していた。また、分析対象である夜のニュース番組の場合、放送当日午後の早い時間帯にはどのオリンピック競技をどのくらいの時間取り上げるかについてほぼ決定していることも共通していた。そして、それらについての最終決定権は東京にいる番組のトップが持っているとのことであった。

オリンピックは競技日程が決まっており、いつどの競技がどれぐらいの結果になるだろうという報告が事前取材により番組担当者で共有されている。そこからA氏は「注目度」「視聴者目線に立って」放送の順番を決めていると述べた。

また、メダルを獲得した選手がニュース番組に生中継で出演しインタビューを受けることが多いが、そのとりまとめはジャパンコンソーシアム（以下JC、JC =Japan Consortium）が行っていた。JCが日本オリンピック委員会（以下JOC、JOC＝Japanese Olympic Committee）に連絡をとり、各放送局はJCと連絡をとりインタビューの調整を行っていることが明らかとなった。

B氏によるとJOCはメディアに出演するメダリストについての情報をJCに提供し、メディアからの回答を受けて出演要請のあった番組について出演時間やどの番組から出演するかという順番をJCが調整している。リオオリンピック時には、日本での放送開始時間の早い（リオ現地では朝9時に放送開始する）NHKの『ニュースウオッチ9』から出演が始まり、その後各番組に出演していたそうである。このため、選手のインタビュー時間やその日の競技結果を考慮して、ニュースをどのような順番で放送するか考え、組んでいたそうである。

③ニュース取材・制作体制

オリンピックやFIFAワールドカップなど、国際スポーツ大会開催時に一時的な放送システムとして設置される国際放送センター（以下IBC、IBC＝International Broadcasting Centre）が世界各国に映像を配信し、それを各国メディアが使用する。これがオリンピックの基本映像となる。このIBC配信の映像に加え、NHKと日本の民間放送局が海外のスポーツイベント時に日本向け映像を共同制作するJCの映像を各局各番組は使用する。さらに各番組は独自映像の撮影や取材を行い、他の番組との差別化を図っている。それらはリオと東京で分担しており、リオの取材班は現地の様子、選手や選手の家族等の関係者への取材を行うことが多い。加えてオリンピック関連ニュースや、ブラジルについて理解を深めるような政治・経済・社会のニュースもリオ取材班が担当する。

ただしA・B・Cの3氏全員が、リオは治安が悪いため、取材班の安全を確保するために行動を制約されたと述べた。このため取材の多くは競技場とオリンピック選手村が多かったそうである。

④ニュースにおけるジェンダーについて

ニュースの取材や放送順位、映像やナレーション等の表現において、女性選手と男性選手で異なる扱いはあるかと尋ねたところ、A・B・Cの3氏全員が「違いはない」と述べた。

ただしB氏は「卓球の愛ちゃんが象徴的だった」と述べ、リオオリンピックは彼女のキャリアの集大成として注目されており金メダルを獲得することはなかったがそれと同等に報道は盛り上がっていたと指摘した。B氏は金メダル獲得が期待されていたが負けて銀メダルとなった吉田沙保里選手について「吉田沙保里は純粋に、吉田が負けたっていうのが事件であるというので全力でやってました」と述べた。選手の映像についてB氏は「象徴的」場面を選び切り取ることに注力しているとし、吉田選手が負けた瞬間の象徴的映像として天井に付いたカメラでズームインしていくという場面に言及した。

B氏は選手の取り上げ方に関し「男性だから、女性だからっていう意識は、当時そんなになかった」とし、「それよりも萩野と瀬戸のライバル対決だとか、そういった背景を探るつくり方」を心がけていたと語った。

C氏は、性別によって基本的に映像は変わらないが、競技によって男女の速度が異なるため、カメラのサイズを男女で変えて追っているが、それは競技の特徴として変えている部分だと述べた。また、水泳等の生身の競技において女性選手の身体を撮影する場合、性的なアングルにならないよう注意していると語った。また、脚色するわけではなく「常にかっこいいものをよりかっこよく撮ってあげよう」という気持ちはあるが、見た目ではなく実力によるものだと述べた。

A氏は選手を愛称で呼ぶ場合について「私個人は使ったことはない」が「なでしこなんかはよく使います」と述べた。団体競技について愛称を使う一方で選手個人について愛称を使わない理由について「砕けすぎる印象になる」や選手自身が有名で「名前で引ける人を、福原さんだったら福原愛で引けるものをわざわざ愛ちゃんにする必要は、逆に言うと、ないかな」と語った。

⑤ニュースにおけるダイバーシティについて

選手のダイバーシティについて、B氏は「難民選手団」の参加やブラジルのファベーラ出身の選手が金メダルを獲得したことについて触れた。

C氏はリオ以外のオリンピック報道の経験があるためそれらの特徴について言及した後、リオオリンピックが開催されたブラジルの多様性について他の大会と比較して以下のように述べた。

> 競技会場ができるのが遅くて。（中略）これ、ほんとに間に合うの？みたいなことがたくさんあり、ブラジルの人たちって全然悪気はないんですけど、別にうまくいかなくてもそんなに気にしないっていうか、文化がもちろん違って。（中略）でもいいなと思ったのは、地元のボランティアの人たち、ほんとにオリンピックのことを楽しみにしていて（中略）その人たちの年齢構成も多種多様だったし、（中略）ブラジル中から来てて、なんか俺が支えてるんだってこと、この大会をみたいなことをみんな誇りに思ってて、この人たちいいなって思いましたし、なんかそういう意味で成功のオリンピックだったんだろうな。

C氏はこのようなリオの大会ボランティアについて取り上げたと語った。

セクシュアル・マイノリティの選手や関係者が史上最も多くカミングアウトしたことについては、3氏とも「知らなかった」と述べた。A氏は局としては取り上げたはずとし、さらに「日本人選手がカミングアウトしていたら必ず取り上げたと思う」と述べた。

⑥SNSの活用について

現在、番組HPのアナウンサーやキャスター等によるブログ、番組（番組キャスター等）公式Twitter、Facebook、Instagramや、局公式ニュース（YouTube）等、様々な形でテレビニュースや当該番組情報が発信されている。リオオリンピック当時、B氏によると、テレビで放送されないオリンピック取材こぼれ話を記事にまとめ、番組公式HP内のブログで発信していたと述べている。

A・B・Cの3氏全員が共通して述べたのは、SNS専任担当の存在が必要ということである。多くの局でインターネット報道の担当部局があり、現在ではテレビ放送とほぼ同時にニュースがインターネット上に配信されている。しかし、ニュース番組等が独自でSNSと連動するには人材が足りないということであった。3氏はあくまで放送ディレクターであり、SNS担当ではないからである。

C氏によると、リオオリンピック当時よりもスポーツとSNSの連携は発展しており、SNSのオリジナルコンテンツも増えたという。だが、サービスは増えても人手が増えないことが悩みであると述べた。

(2) リオオリンピック参加選手

インタビューを行ったのは日本代表としてリオオリンピックに参加した日本代表選手3名（D氏（女性)、E氏（男性)、F氏（男性））である。

①SNSの活用について

JOCや所属団体、スポンサー等によってSNSによる選手の情報発信が推奨される一方で、調査対象者全員がSNSによる情報発信について非常に慎重な姿勢を示した。共通点は、公開して利用するSNSと、個人的に利用するSNSとで使い分けをしていることである。

D氏は仕事として一般・関係者向けにブログ等の記事を書き、個人的にはFacebook（閲覧のみ）とLINEを利用している。E氏は選手の個人ブログとして情報発信をしている。その他指導の一環としてYouTubeに動画をアップすることもある。個人としてはInstagram、Twitter、Facebookを利用しているが、現在は公開規模を友人のみに限定している。F氏はブログ、FacebookやTwitter、Instagramでの発信経験があるが、現在主に利用しているのはTwitter、Instagramである。Twitterは自身の活動、公式的な活動、どうしても伝えたい考え方を表明したい場合に使っており、自身の公式メディアのように利用している。InstagramはTwitterよりもプライベートな内容を多くアップしている。

3人がSNS利用に慎重な理由はそれぞれ異なる。D氏の場合はSNSによる情報発信や受信に縛られたくないという考えが第一にある。また、マス・メディアに自らの意図と異なる取り上げられ方をした経験や、報道内容から犯罪にあった経験があるため、情報発信する際は、受け取る側と取り上げられる側の双方に対し注意深くなったと述べた。

E氏はスポンサーに、ファンから応援してもらうためにSNSを始めるよう勧められたのがきっかけであった。開始当初はすべてのSNSを公開していたが、政府の公式行事に参加した時の感想や、合宿時の選手同士の遊びについてSNSに記事としてあげたところ、閲覧者から批判のコメントがあり、それ以来公開する内容には年々注意深くなっているという。E氏がSNSを始めた当初の目的はファンのためであったが､実際にSNSを利用してファンが増えたかというと「それはないと思う」と語った。ただし、SNS閲覧者の世代特性があり、Facebook等は上の世代は利用しないがブログは見るという人も多く､そのようなファンのためにブログは続けると述べた。また、マス・メディアの取材を受ける際に、ブログの内容から質問を受けることもあるという。よく閲覧されるのは試合結果であり、特に優勝した時の記事の反応は大きいと述べた。

F氏はブログでの情報発信に関しては、当時流行していたということに加え、競技を広めたいという思いから、自身の国際大会での活躍や海外での生活について記事を書いていた。TwitterやInstagramは友人に利用を勧められ、アカウントを作成したことがきっかけとなり利用している。最近SNSの使い方について考えており、情報を発信した方がいいこともあるが、炎上等のリスクや自らの立場を考えなければならないと語った。SNSによる発信では、第一に決して批判はしないこと、第二に文章を出すときは何回も確認すること、第三に出すタイミングについて気をつけてい

ると述べた。たとえばスポーツ界で事件が起こり、自らの考えを表明したい場合はタイミング良く世界に向けてつぶやく。そのような意見表明がマス・メディアに取り上げられたこともあったそうである。リオオリンピック時には、「競技戦略の一部」としてSNSによる情報発信を行い、練習結果や調子のいい事をポジティブな言葉でライバルに向けて発信していたそうである。また試合結果が良い時の反応が最も良く、「いいね」やリツイート、フォロワー数も増加するそうである。特に試合結果がテレビで取り上げられた時は相乗効果で数が伸びた印象があると語った。しかし、現在TwitterやInstagramは情報収集の一環と捉えている。

②性別によるマス・メディアによる取り上げられ方の相違について

D氏は新聞・テレビ・雑誌・書籍を始めとして様々なマス・メディアで取り上げられた経験を持っている。それらの内容は問題ない場合がほとんどであるが、中には事実と異なる内容が書かれ、その情報が広まってしまうこともあった。

また、D氏が行っている競技に対する人々の認識がオリンピック競技になる前後で変化したとも語った。オリンピック競技以前は「男がやるもんだ」「何で女の子がやるんだ」と社会や一部メディアも捉えていた。しかし、オリンピック競技化後は周知が進み、「オリンピックに行くために」ということで社会やマス・メディアの見る目が変化したと述べた。さらに、女性選手がキャリアの中で結婚し、子育てをする際に一般家庭とは異なる家族の在り方や、役割分担が必ずしも性別によらないことに言及し、報道が新しい家族の在り方を広め、同じような人々を勇気づけてくれるといいと語った。

E氏は新聞・テレビ・雑誌を中心に取り上げられ、自らの意図と異なる取り上げられ方をした経験はないと述べた。性別による報道の差異については感じており、E氏が行う競技では男性選手よりも女性選手の方がマス・メディアによく取り上げられると語った。それは「女子選手がこれやんの？えっていう競技」は別競技であっても同様だと思うと述べた。また若手とベテランでは若手や初めてオリンピックに出場する選手の方が注目度は高いが、その他のことで性別による報道の差異を感じることはあまりないと語った。

F氏は性別による報道の差異について、ある女性選手が「かわいい」というだけで報道され、自分の取り上げられ方と、自分の競技レベルとの差に悩んだ例をあげた。「アスリートだから結果で取り上げられるのが一番だし、そのほかの部分ももちろんプラスアルファであっていいと思う。ただ、そっちが越えてしまってはアスリートじゃないし、難しい」と述べた。

F氏自身はリオオリンピックの競技結果をさまざまなメディアで取り上げられた。また、記者がある程度「台本を作って」来ると感じており、インタビュー時に「こういう言葉、言わせたいんだろうな」と思うことがあった。さらに、台本に則ったメディアの「欲しい画」があると述べた。近年、「自分の見え方」を考えながら発信しており、「メディアに対して発する言葉っていうものは、自分の中で選んでしゃべっている」とし、自分を守るためにマス・メディアとは一定程度の距離を置いた付き合い方をしていると述べた。

③マス・メディアに期待すること

D氏はマス・メディアの力によって競技が広まり応援してもらえるようになったことに感謝すると同時に、その影響力の大きさゆえに複雑な感情を持っていると述べた。以下はインタビュー内容の抜粋である。

> メディアの方たちは、どうにかストーリーを作り、その初めからのストーリーに似せようとしているパターンと、本当に私たちの声に、しっかり耳を傾けてストーリー化してくださるパターンがある。そのメディアの方のストーリー化と、自分たちがやってきたストーリー化が本当に合致してれば最高なんです。だけど、やっぱりそれを先にストーリーを作られてしまうと、やっぱりそこにいろんなことが生じていて、後々も、お互い嫌な気持ちじゃないですか。

また、D氏は東京オリンピックを前に、日本の子どもたちや日本人や日本人選手にオリンピックのアジェンダや意義を知ってほしいと述べた。報道はメダル獲得に終始し、選手も金メダルを目指すだろうが、取れなかった時にもオリンピックを楽しんで終わってほしいと語った。そのように思う理由として、D氏がリオオリンピックに参加した時、オリンピックの素晴らしさを理解せず、競技に集中していたことを悔やんでいると語った。

E氏はオリンピックのメダル報道について「過熱」と表現し、メダルを獲得すると盛り上げるが、結果が悪いと引いていくと述べた。その上で「別に盛り上げなくていいんで、広く長くやってほしい」。「もう少しいろんな種目をやって、それをオリンピックの前だけじゃなくて、(中略) サッカー、野球だけじゃなくて、常にニュースに入っていくような感じにしてほしい」とマス・メディアに対する要望を語った。

F氏は「選手の正しい意図、選手が言いたいことをちゃんとそのまま伝えてもらいたいし、活躍した選手はその丈に応じた取り上げ方をしてもらいたい」と述べた。

また、密着取材でなくてよいが、ある程度日常的な取材は必要だとF氏は考えている。それは「結局選手も人だし、いきなりぽっと出の人が来て、自分の本心のところをグッとえぐるようなコメントを求められても、(中略) 答えられないです」と語った。さらに、ネット上の情報だけで取材し制作する記事への危惧や、選手の意図が正確に伝わらない場合や、自らの考えを表明したい場合について以下のように語った。

> Twitterだったりとか、もう表面上の話だけでポッと記事つくったりもできちゃうわけだし、(中略) だからこそ、選手は一人ひとりTwitterとか、そういうものを持って、自分の言葉で発するっていうものも必要なんだと思ってます。言葉尻だけ取って文字にするっていうのは非常に危ない。(中略) その前後も含めて報道していただければいいんですけど、そうじゃない場合もあるので。

F氏が活躍した選手はそれに応じた取り上げ方をしてほしいと語った理由は、F氏自身の経験や他の競技結果報道にある。それは優勝した選手を取り上げずに、負けた選手を報道することがあるからである。優勝した選手を取り上げない理由は色々とある。しかし、マス・メディアによって選手の活躍が国民に報じられ知名度が上がり、そして応援するファンが増えて、その恩恵が選手に対して還元されるため、マス・メディアの必要性は理解している。しかし注目されても結果が出ない場合は取り上げられないこともわかっている。だからこそ観客には「すごいパフォーマンスに対して、それが正しい指標で、これはすごい記録なんだっていうことが分かって、ああすごい」と思って応援してほしいと述べた。

第4章　まとめ

本章では内容分析結果をまとめ、インタビュー調査結果を加え本研究全体の考察を行う。そして最後に日本のオリンピックニュースへの提言を行う。

1　結果と考察

(1) 結果のまとめ

①内容分析基礎項目

●全体

同じ60分番組であるが、ニュース1本あたりの平均ニュース時間は『NW9』202.1秒／本に対し、『ZERO』128.7秒／本であった。『NW9』の方が『ZERO』よりも1本あたりのニュースが長い傾向にある。

報道分野の傾向は、2番組とも「スポーツ」がもっとも多く取り上げられ（『NW9』46.4%、『ZERO』40.9%）次いで「社会」（『NW9』16.9%、『ZERO』35.6%）が報道されていた。その内訳をみてみると『NW9』の方が『ZERO』よりもスポーツに力を入れ『ZERO』は『NW9』より社会に力を入れていた。また、『NW9』は「800　歳時／気候」（14.9%）、「100　政治」（12.8%）について『ZERO』の2倍以上報道している。8月は台風についての気象情報や、終戦記念日や長崎・広島の原爆投下等について報じており、公共放送としての役割を果たしているといえよう。

また、ニュースの発生地を調べてみると2番組とも自国（日本）約6割（66.5%、63.6%）、ブラジル約3割（28.3%、27.8%）でこの2国の合計で9割を超えた。そしてブラジルを「ニュースの発生地①」とするニュースの9割以上が「900　スポーツ」（96.8%）で占められ、スポーツ以外のニュースは188本中わずか6本であった。

●オリンピック関連のスポーツニュース（「ニュースの分野②」）

オリンピック関連のスポーツニュースは、総ニュース本数の33.3%を占めていた。またメダル獲得数が多い競技（「水泳」「卓球」「柔道」「レスリング」「体操」）のニュースが多く取り上げられる傾向が明らかとなった。その一方で、1本のニュースとして取り上げられなかった競技は、28項目中12項目にのぼった。

今回のコーディング方法では『NW9』が複数の競技結果を連続して取り上げること（「903（ミックス）」22.1%）が多く、『ZERO』はオリンピックの競技結果以外で日本選手団の出国や帰国等のニュースや試合の予告（「その他」26.3%）が多く、オリンピックニュースの報道スタイルが2番組で異なることが明らかとなった。

②内容分析ジェンダー項目

●全体

オリンピック競技等のニュース（「ニュースの分野②」）の報道回数は、女性選手45.6%、男性選手53.6%で男性選手の方が多かった。オリンピック報道で取り上げられた選手の「国籍」と「性別」をみてみると、約9割（89.6%）が日本人選手で占められ、その内訳は日本の男性選手（49.0%）、日本の女性選手（40.3%）であった。外国人の選手は10.5%、セクシュアル・マイノリティの選手の報道は国籍を問わず0回であった。

●男女共通で取り上げられる項目

オリンピック競技等のニュース（「ニュースの分野②」）の報道回数は、日本人選手がメダルを獲得した競技が報道回数上位を占めている。特に金メダルを獲得した場合は報道回数が多くなる傾向にあるが、同じメダルを獲得した競技であっても報

道回数に違いがあることも明らかとなった。

報道回数トップ10を「性別」でみてみると、男女ともに全員が日本人であり、正式名称以外の「呼称」は、男女ともに注目度の高い強豪選手につけられやすく、選手の「プライバシー」は「過去や未来」について多く触れられると同時に、「監督・コーチ」等選手の背景がわかる項目について男女同程度言及される。さらに、選手の「容姿」については「美しさ」よりも「力強さ」の表現が多い。選手の「感情・表情」は「喜び」や「気迫」について男女ともに多く取り上げられていた。

●女性選手

オリンピック競技等(「ニュースの分野②」)のニューストップ5は、1位「ミックス」(13.5%)、2位「バドミントン」(5.8%)、3位「レスリング」(5.0%)、「水泳」(5.0%)、5位「卓球」(4.8%)であり、メダル獲得競技が上位になった。報道回数トップ10は、全員がメダリストであった。しかし、報道回数1位は卓球団体で銅メダルを獲得した福原愛選手(16回)、2位はバドミントンダブルスで金メダルを獲得した高橋礼華選手(10回)、3位はレスリングで銀メダルを獲得した吉田沙保里選手(9回)であった。

また、女性選手に対する「呼称」の特徴は「○○ちゃん」等、複数の選手に対する子ども扱いがみられ、女性選手の「プライバシー」については「親・兄弟姉妹」等に関する情報が多く、「容姿」については女性選手の方が「力強さ」(62.0%)について言及されることが多かった。女性選手の「感情・表情」でよく提示されるのは、「悲しみ」(73.3%)等どちらかといえばネガティブな項目であった。

●男性選手

オリンピック競技等(「ニュースの分野②」)のニューストップ5は、1位「ミックス」(15.0%)、2位「水泳」(6.0%)、3位「体操」(5.8%)、4位「陸上」(5.5%)、5位「柔道」(4.5%)であった。報道回数の1位は金メダリストの萩野公介選手(16回)、2位内村航平(13回)、3位は卓球シングルスで日本人初の銅メダリストとなった水谷隼選手(11回)、4位は金メダリストのベイカー茉秋選手(9回)、銅メダリストの錦織圭選手(9回)、白井健三選手(9回)であった。

また、男性選手の呼称は選手個人の実績や技量に由来する「呼称」が多く、「プライバシー」については幅広い関係者が取り上げられる傾向にあり、「感情・表情」は「喜び」(72.7%)等について多く取り上げられていた。

(2) 新しい発見

①セクシュアル・マイノリティの選手は全く取り上げられなかったが、「難民選手団」「ファベーラ出身のブラジル代表選手」「オリンピックボランティア」等、リオオリンピックのダイバーシティの一端を示す存在をテレビニュース制作者たちは取り上げた。

②日本のリオ現地取材班は、安全確保のために取材先を制限された。

③マス・メディアは、選手の思いや事実を正確に汲みとって伝えるのではなく、あらかじめストーリーを作り、それを報道する場合があると選手は感じていた。

④マス・メディアは競技結果に応じた選手の取り上げ方をするわけではないと選手は感じていた。

⑤女性が競技をするイメージがない競技で活躍する女性選手は、マス・メディアに取り上げられやすいと選手は感じていた。

⑥選手がSNSによる情報発信に慎重になる要因として、自らの意図と異なる情報や誤った情報を報道された経験、SNSで批判的コメントを受けた経験が影響していた。

以上の結果を踏まえ、次項で考察を行う。

(3) 考察

①報道回数（「ニュースの分野②」）におけるジェンダーと国籍

「性別」は女性選手（45.6%）よりも男性選手（53.6%）の方が多く取り上げられ、セクシュアル・マイノリティの選手の報道は0回であった。選手の「国籍」でみてみると、約9割（89.6%）が日本人選手（女性40.3%、男性49.0%）で占められ、外国人の選手は約1割（10.5%）であった。

報道回数は日本代表選手の「性別」構成比（図1）と同じ傾向を示した。選手の「国籍」は日本人9割で席巻されており「日本の競技優先」という制作者の方針が反映され、オリンピックニュースは日本人選手の結果報道に終始したといえよう。また、セクシュアル・マイノリティの選手は全く取り上げられておらず、リオオリンピックが「性的指向」の多様性を目指した大会であるということはテレビニュースから伝わることはなかった。

ただし、リオの治安が悪く安全性確保のために取材先に制約がある中、「難民選手団」やブラジルの「ファベーラ出身の選手」等、国や地域、出身や出自、文化、政治性等の多様な選手を取り上げたことは評価すべきであろう。

②競技結果等の報道からみるジェンダー

日本人選手のメダル獲得数によって報道回数が変動する。ゆえにリオオリンピックニュースは「メダル至上主義」（稲垣 2016：17）であるといえよう。

しかし、男女ともに順位に比して金メダリストよりも多く取り上げられた競技と選手が存在する。それは「卓球」の福原愛選手をはじめとする石川佳純・伊藤美誠選手、「バドミントン」の奥原希望選手、「レスリング」の吉田沙保里選手。男性選手では「テニス」の錦織圭選手、「陸上」のケンブリッジ飛鳥選手、「7人制ラグビー」、「サッカー男子日本代表」である（図5、6）。これらの選手はプロ競技で人気が高いものもあれば、活躍を期待されながら敗れた選手、予想外の活躍があった競技もあり、複数の要因によってニュースに多く取り上げられたと思われる。しかしながらそこにメディアが作る「感動」の準備（森田 2016：30-31）がないか、選手の性的魅力を重視した報道ではないか批判的に検討する必要がある。そして、メダル獲得がなかったために周辺化され、不可視化された競技や選手が存在することを忘れてはならない。

③ニュースに描かれる選手のジェンダー

選手の正式名称以外の「呼称」は、注目度の高い強豪選手につけられやすいが、女性選手は「○○ちゃん」という子ども扱いされる選手が複数みられ、男性選手は選手個人の実績や技量に由来するものが多い傾向があった。この点についてはジェンダー・バイアスがいまだ強固に残っているといえよう。

選手の「プライバシー」は「過去や未来」（n=81）について多く触れられ、女性選手はそれに加え「親・兄弟姉妹」（71.9%）、男性選手では広範な関係者からの情報がニュースに付加される。これらの情報がニュースで取り上げられる理由は、ニュース制作者によると「視聴者に興味をもってもらう」ためである。そして、選手の「容姿」については男女ともに「美しさ」（n=28）よりも「力強さ」（n=121）の表現が多く見受けられ、女性選手の「力強さ」（62.0%）への言及が男性選手（38.0%）よりも多く見受けられた。これを女性選手の身体や能力への称賛と受け止めることは早急であり、注意が必要と思われる。近年、男性選手だけが参加できる競技や種目であったものに女性選手が参加し、男女の競技・種目に偏りがないようになってきた。しかし、長らく男性選手だけが参加できた競技（たとえば「ボクシング」「野球」）や、女性選手だけが参加できる競技（たとえば「新体操」「シンクロナイズドスイミング」）があ

り、これらは男女の性別による競技のすみわけ（性別分業）や顔や身体に傷がつくことへの配慮や、美しさを重視する競技に女性の性的魅力に価値をおく男性のまなざし（male gaze）の裏返しでもある（飯田 2018：2-3）ため、それらへの検証が必要である。

また、インタビュー調査から男性競技であるイメージが強い競技を行う女性選手がメディアに多く取り上げられると選手は感じていることが明らかとなった。それはスポーツにおいて男性性（速さや力強さ）の優位が保持されたジェンダー秩序の中でマス・メディアが人々の興味・関心をひく行為であるといえよう。

また、今日的には男性の性的魅力に価値をおき、視聴者の興味・関心を引くような報道であるかの検証も同時に必要であろう。たとえば女性向け雑誌の『anan』はリオオリンピックに際し『anan SPECIALオリンピック男子』という特集号を出した（MAGAGINE HOUSE MOOK 2016）。「ルックスも実力もピカイチ！注目アスリート22名」と題し、オリンピック代表の男性選手へのインタビューと豊富なグラビアが掲載されたものである。選手の人柄や競技の魅力についての内容が主であるが、注意していかなければならない。

選手の「感情・表情」については「喜び」（n=245）や「気迫」（n=112）について男女双方で多く取り上げられていた。これらは「日本人がメダルを取ったら最優先」という制作者の報道方針とも一致し、勝利を喜ぶ瞬間を切り取っている証左といえよう。「性別」による差異として、女性選手は「悲しみ」（73.3%）等どちらかといえばネガティブな「感情・表情」が多い結果となった。この点に関しては、報道回数上位の女性選手（たとえば福原愛選手や吉田沙保里選手）が試合結果によって泣く姿が多く報じられている影響があると考えられる。

④SNS時代のテレビニュースとオリンピック代表選手

日本代表選手は、JOCや所属団体からSNSによる情報発信を推奨されている。しかし、インタビュー調査によって情報発信に慎重になる要因が明らかとなった。それは自らの意図と異なる情報や誤った情報を報道された経験や、SNSで批判的コメントを受けた経験である。また、そのようなことがあるからこそ、選手はSNSを利用して自分の言葉で意見を表明することが必要であると考えている選手もいた。調査対象となった選手は総じてメディア・リテラシーが高く、マス・メディアの影響力やSNSによる情報発信のメリット・デメリットを良く理解していた。同時に、マス・メディアによって選手の活躍が報じられ、ファンが増え、それによって選手が支えられていることをも理解しており、それゆえにマス・メディアと選手の良い関係が重要だと思っていた。

また、マス・メディアに対する要望として、オリンピック開催の有無に関わらず広く、長くスポーツを取り上げること、選手の正しい意図を正確に伝えてほしいこと、活躍した選手はそれに応じた取り上げ方をしてほしいこと、選手の多様なあり方を伝えること等が述べられた。

一方、テレビニュースの制作者は、リオオリンピック当時は現在ほどインターネット報道の担当や部局が整備されておらず人手も足りなかったと述べている。2015年に実施された「ソーシャルメディアに関する意識調査」によると、Facebook、Twitter、LINE、Instagramでよく読むジャンルについて尋ねたところ、「日常の出来事」が突出して多く、次いで「生活情報」「芸能」「面白い情報」「社会に関する情報」「芸能情報」の後に「スポーツ」となっていた（遠藤 2016：50）。現在はSNSのオリジナルコンテンツも増え、スポーツ報道とSNSの連携も発展したため、「スポーツ」を読む人は増加しているだろう。また、スポーツ選手が情報発信することが推奨されているため、書く内容としての「スポーツ」も増えることが推測される。したがって今後視聴者は、新しいオリンピックニュースに接する可能性があるといえよう。

2　提言

2020年に開催される東京オリンピックを前に、スポーツとテレビニュースの新たな関係を構築すべく、メディア･リテラシーの概念（鈴木編 2003）を用いて視聴者とテレビニュース制作者、そして選手に対し提言を行う。

(1) テレビニュースの視聴者へ

テレビニュースはすべて構成されたものである。ゆえにオリンピックの現実そのものを反映しているのではなく、制作者の方針や取捨選択、さまざまな制約を反映している。そしてテレビニュースはオリンピックについて何が重要で、何が重要でないかを判断し、解釈を加え、それに基づいて構成する「現実」を提示している。視聴者は、テレビニュースが提示するオリンピックの「現実」を批判的に捉えなければならない。また、テレビニュースは、ものの考え方（イデオロギー）や価値観を伝えている。オリンピックに参加する選手のジェンダー、セクシュアリティや国籍・出身、人種や民族の描き方、メダル獲得を至上とする報道方針もその１つである。さらに、テレビニュースには商業的な意味もある。民間放送局ではCMが流れ、それらのスポンサーの広告費が民間放送局の収入となる。このため、視聴者を消費者と捉え、テレビニュースをみてもらうために内容を工夫している。

このような状況をふまえ、オリンピックを楽しむために、主体的かつ批判的にテレビニュースを視聴し、オリンピック選手自身がSNSによって発信する情報や、テレビニュースが取り上げない幅広い情報の発信、受信、収集を心がけることが重要であると思われる。視聴者の新しい情報接触は、テレビニュース、選手、視聴者との三者による新しいコミュニケーションにつながるだろう。

(2) テレビニュース制作者へ

制作者自身や所属する組織が報道するニュースが、現実を反映したものではなく、局や番組、意思決定権のある管理職の方針やさまざまな選択の結果、構成されたものであることを意識する必要があると思われる。また、報道する競技や内容の「偏り」にジェンダーや国籍・出身、人種や民族、性的指向に対する差別や偏見、ステレオタイプを助長するようなものがないか常に考え、ニュースを制作しなければならないだろう。なぜならば、リオオリンピック開催期間中のメディアには一部ジェンダー・バイアスが認められ、セクシュアル・マイノリティの選手の存在を不可視化し、さらに外国人選手の報道は約1割に留まり、メダル獲得に特化した報道によって1本のニュースとして報道されない競技も12にのぼったからである。テレビニュースには放送時間をはじめさまざまな制約があり、報道内容には限界があることもたしかである。しかしながら、日本の放送番組であるからといって日本人選手に焦点を当てた報道ばかりでは、スポーツニュースは行き詰まる。ゆえに、SNSを活用し、スポーツとニュースの新たな連携を探り、視聴者にさまざまな情報を多様な視点で届けることがオリンピックニュースの新たな表現を切り拓くことにつながるであろう。

(3) オリンピック選手へ

オリンピックに参加している選手の多くは、良い成績を残すために目標を定め、それにむかって体と技術、精神を鍛えている。しかし、オリンピックに参加する時は、オリンピックの意義も理解し、自らが参加する競技の素晴らしさや楽しさ、競技に携わる思いをSNSで発信することも視野に入れる必要があるだろう。選手自らが発信する情報はマス・メディアが取り上げない情報を補完し、選手と視聴者、マス・メディアとの新

たなコミュニケーションを創り出すことになるだろう。

今日、スポーツは「する・みる・ささえる」という3つの行動から捉えられている。オリンピックは、その開催を契機に開催国の市民にスポーツをすること、試合を見ること、オリンピック選手や大会をボランティアとなって支えることで社会を変え、それを持続していくねらいがある。2020年東京大会のビジョンには「多様性と調和」「未来への継承」があげられている。東京オリンピックが、日本のスポーツとテレビニュースにとって変化の契機となり、オリンピック選手、視聴者との新しい多様なコミュニーションが行われることを願う。

■注

1）飯田2003；登丸2007；阿部2008；平川2009；田中2012。

2）筆者が所属する国際テレビニュース研究会では、北京オリンピックからNHK『ニュース7』、日本テレビ『NEWS ZERO』、テレビ朝日『報道ステーション』、TBS『NEWS23』、フジテレビ『NEWS Japan』＋『すぽると』を分析対象としていた。今回は研究期間が1年であること、研究体制が1名であること、ニュース番組の放送時間、公共放送局と民間放送局を考慮して『NW9』と『ZERO』を分析対象とした。

3）国際テレビニュース研究会の図（図2）、表（表4、5、6）や内容分析項目、分析手法を使用しているが、今回の調査は選手のダイバーシティに関する分析が主目的であるため、分析しない項目やコーディング方法の違い（特に表6「ニュースの分野②」の「902　その他」「903　ミックス」）・追加（ジェンダー分析項目）がある。

4）民間放送局ではニュース番組内でCMが放送される。1本のニュースの途中でCMが入り、CM後に続きのニュースが放送されることがある。この場合のCMの時間を計測する項目のことを「ニュース内コマーシャル（内CM）」とし、以下の計算によってニュース時間を算出する。

$$N = E - S - NC$$

※N＝ニュース時間、E＝終了時刻「分／秒」、S=開始時刻「分／秒」、NC＝ニュース内コマーシャル

5）「雪だるま式標本法」ともいう。調査において、ある調査対象者から知人を紹介してもらい、サンプル数を増やしていく方法である。

■参考文献

阿部潔，2008,『スポーツの魅惑とメディアの誘惑　身体／国家のカルチュラル・スタディーズ』世界思想社.

Bruce, Toni, Hovden, Jorid and Markula Pirkko (eds.), 2010, *Sports Women at the Olympics: A Global Analysis of Newspaper Coverage,* Sense Publishers.

Bruce, Toni, 2015, "New Rules for New Times: Sportswomen and Media Representation in the Third Wave," *SEX ROLES A Jounal of Research,* vol.73 (3/4):1-16.

遠藤薫編著，2016,『ソーシャルメディアと＜世論＞形成　間メディアが世界を揺るがす』東京電機大学出版局.

福井洋平，2017,「『おネエ』しかいらない」『AERA』朝日新聞社6.12号：13-15.

後藤太輔，2018,『フィギュアスケートとジェンダー　――ぼくらに寄り添うスポーツの力』現代書館.

M. Hall Ann, 1996, *Feminism and Sporting Bodies: Essays on theory and practice,* Human Kinetics Publishers（＝2001, 飯田貴子･吉川康夫監訳『フェミニズム･スポーツ･身体』世界思想社）

平川澄子，2009,「スポーツメディアにあらわれるヒロイン」『体育の科学』59(9)：609-613.

日吉昭彦，2015,「Ⅱ　ロンドンオリンピックをめぐる英国報道の背景」『平成25～27年科学研究費補助金基盤研究C研究成果報告書　ロンドンオリンピック開催期間における日本のテレビニュース報道　北京オリンピック開催期間におけるテレビニュース報道との比較を通して』国際テレビニュース研究会：7-20.

飯田貴子，2002,「第4章　メディアスポーツとフェミニズム」橋本純一編,『現代メディアスポーツ論』世界思想社：71-90.

――――，2003,「新聞報道における女性競技者のジェンダー化――菅原教子から楢崎教子へ」『スポーツとジェンダー研究』1：4-14.

――――，2004,「第2章第2節　スポーツ・メディアの現状――テレビスポーツのジェンダー分析」飯田貴子・井谷恵子編著『スポーツ・ジェンダー学への招待』：80-90.

――――，2005,「オーディエンスの多声性とジェンダー対抗的自己形成――女性競技者の新聞報道分析」『スポーツとジェンダー研究』3：4-17.

――――，2007,「ジェンダー視点から検証したアテネオリンピック期間中の新聞報道」『スポーツとジェンダー研究』5：31-44.

――――，2008,「スポーツジャーナリズムにおける『女性』の不在――デスクへの調査から見えてくるもの」『スポーツとジェンダー研究』6：15-29.

Iida, Takako, 2010, 17. Japan Japanese Case study: The Gender Difference Highlighted in Coverage of Foreign Athletes, Bruce, Toni, Hovden, Jorid and Markula Pirkko (eds.), , *Sports Women at the Olympics: A Global Analysis of Newspaper Coverage, Sense Publishers:225-236.*

飯田貴子，2018,「Ⅰ基礎理論　1　スポーツとジェンダー・セクシュアリティ」飯田貴子･熊安貴美江･來田享子編著『よくわかるスポーツとジェンダー』ミネルヴァ書房: 2-3.

稲垣康介，2016,「矛盾までのみこんでいく五輪の魔力　問われる開催国メディアの視座」朝日新聞『Journalism』7月号：15-23.

伊藤公雄，1999,「Ⅱ現代のスポーツ文化　第6章　スポーツとジェンダー」井上俊・亀山佳明編『スポーツ文化を学ぶ人のために』世界思想社：95-107.

伊藤儀雄，2015,「第4章　ニュースメディア―『ネットニュース』は公共性を保てるか」藤代裕之編著『ソーシャルメディア論　つながりを再設計する』青弓社：68-84.

神原直幸，2001,『メディアスポーツの視点』学文社.

Kennedy, Eileen and Hills, Laura, 2009, *SPORT, MEDIA AND SOCCIETY*, Berg Publishers.

小玉美意子ほか，2006,「国際テレビニュース比較研究2004――アメリカ・日本・イギリス・ブラジル（内容分析編）」『ソシオロジスト』8号：171-266.

――――ほか，2012,『平成20年度～22年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書　北京オリンピック報道　テレビニュースは何を伝え、視聴者の対中国意識はどう変化したか』国際テレビニュース研究会.

小林直美，2008,「第Ⅳ章　何をどう調べるか？－調査の目的と設計」小玉美意子編著,『テレビニュースの解剖学　映像時代のメディア・リテラシー』新曜社：56-69.

――――，2016,「北京・ロンドンオリンピック開会式前後のニュース・フレーム～日本のテレビニュース報道の内容分析～」『山形大学紀要（社会科学）』第47巻第1号: 35-67.

――――，2017a,「ロンドンオリンピックにおける選手のジェンダー表象～テレビニュース内容分析～」『山形大学紀要（社会科学）』第48巻第1号：19-47.

――――，2017b,「北京オリンピック報道で女性選手はどのように表象されたか　テレビのスポーツニュースにおけるジェンダー」『日本スポーツとジェンダー学会第16回大会』口頭発表資料.

熊安貴美江，2018,「Ⅰ基礎理論　2　ジェンダー概念の登場とその影響」飯田貴子・熊安貴美江・來田享子編著『よくわかるスポーツとジェンダー』ミネルヴァ書房：4-5.

Lenskyj, Jefferson, 2008, *Olympic Industry Resistance: Challenging Olympic Power and Propaganda*, State University of New York Press.

MAGAGINE HOUSE MOOK, 2016,『anan SPECIAL　オリンピック男子』マガジンハウス.

Markula, Pirkko ed., 2009, *Olympic Women and the Media: International Perspectives*, Palgrave Macmillan.

森田浩之，2016,「スキャンダルまみれの『東京2020』負のスパイラルから救う道はあるのか？」朝日新聞社『Journalism』7月号：24-31.

中　正樹，2009,「Ⅵ　北京オリンピック開催期間におけるテレビニュース内容分析1～ニュース内容の量的分析～」『武蔵大学　総合研究所紀要』第18号：57-67.

————・日吉昭彦・小林直美，2015a,「ロンドンオリンピック開催期間における日本のテレビニュース報道に関する内容分析」『ソシオロジスト』No.17：147-182.
————・日吉昭彦・小林直美，2015b,『平成25～27年科学研究費補助金基盤研究C研究成果報告書　ロンドンオリンピック開催期間における日本のテレビニュース報道　北京オリンピック開催期間におけるテレビニュース報道との比較を通して』国際テレビニュース研究会.
來田享子，2004a,「スポーツへの女性の参入」飯田貴子･井谷惠子編著『スポーツ･ジェンダー学への招待』：42-50.
————, 2004b,「近代スポーツの発展とジェンダー」飯田貴子･井谷惠子編著『スポーツ・ジェンダー学への招待』：33-41.
Scott,J.W., 1988, *GENDER AND THE POLITICS OF HISTORY*,Columbia University Press (=1992, 荻野美穂訳『ジェンダーと歴史学』平凡社).
鈴木みどり編，2003,『Study Guide メディア・リテラシー『ジェンダー編』』リベルタ出版.
田中東子，2012,『メディア文化とジェンダーの政治学ー第三波フェミニズムの視点から』世界思想社.
特定非営利活動法人アジア女性資料センター，2017,「【鼎談】太田啓子×小島慶子×竹信三恵子　メディア・セクハラが横行する社会の背景とこれから」『女たちの21世紀』no91：8-20.
登丸あすか，2007,「トリノ冬季オリンピック開会式における女性の役割―テレビニュース報道の分析から」『スポーツとジェンダー研究』5：45-55.
————，2010,「ジェンダーの視点によるオリンピック開会式分析--メディアのガイドラインに照らして」『文京学院大学人間学部研究紀要』12：141-150.
梅津迪子，2004,「第5節　女性スポーツの商品化」飯田貴子･井谷惠子編著『スポーツ･ジェンダー学への招待』明石書店：110-117.
山本清文，2015,「ソチオリンピックにおける新聞報道の分析」『花園大学文学部研究紀要』47：115-138.
————･中村浩也･武内麻美，2016,「ソチオリンピックにおける新聞報道の分析（2）―競技種目別に注目して―」『花園大学文学部研究紀要』48：27-41.
山根（吉長）智恵・朴　珍希，2016,「ロンドンオリンピックの日韓新聞記事における一考察」『山陽論叢』第21巻：173-195.

■参考資料

女性スポーツ研究センター，2017,「女性とスポーツの歴史」(2017年3月7日取得, http://www.juntendo.ac.jp/athletes/history/brighton.html).

ハフィントンポスト編集部，2016,「リオ五輪で50人以上がカミングアウトしたのはなぜ？ LGBTの権利向上を目指すスポーツ界」『ハフィントンポスト』(2016年11月21日)(2018年11月12日 取 得, https://www.huffingtonpost.jp/2016/11/20/olympic-and-lgbt-athletes-1_n_13117396.html).

毎日新聞，2016，「リオ五輪　華やかに開会式」『毎日新聞』(2016年8月6日)(2018年11月12日取得, https://mainichi.jp/sportsspecial/articles/20160806/k00/00e/050/282000c).

■参考ホームページ

公益財団法人日本オリンピック委員会，2012, 公益財団法人日本オリンピック委員会ホームページ, (2016年9月9日取得, http://www.joc.or.jp/games/olympic/london/).

公益社団法人日本オリンピック委員会，2017,「オリンピックの歴史 2. 近代オリンピックの始まり」(2017年2月22日取得, http://www.joc.or.jp/column/olympic/history/002.html).

国際オリンピック委員会，2018,『オリンピック憲章（2018年10月9日から有効)』(2019年3月24日取得, https://www.joc.or.jp/olympism/charter/pdf/olympiccharter2018.pdf).

資料1

インタビュー調査の実施にあたって（テレビニュース制作者用）

1．調査の趣旨

・この調査は、ソーシャルメディアを利用し、様々な情報を発信しているテレビニュースの制作者・記者を対象とする調査です。調査の目的は、オリンピックに関する情報を、誰に対し発信しているのか、その目的と方法、テレビニュースや視聴者への影響・効果について把握し、テレビニュースの内容と比較することにあります。
・本調査への参加は任意であり、調査対象者には参加を辞退する権利があります。本調査への参加を辞退したことによって不利益を被ることはございません。

2．調査方法

・本調査は、「山形大学 小林直美研究室」が実施します。
・自局（または番組名、または記者名）のアカウントでソーシャルメディアを利用し、情報発信を行っているテレビニュースの制作者・記者を対象としています。
・「対面聞き取り調査形式」で行います。
・調査にかかる時間はおよそ30分～60分です
・調査の実施にあったては研究代表である小林直美が1人で行います。
・プライバシーに関することがらなどについてお伺いする場合がございます。その際、回答したくない、あるいは回答しづらい質問に関しては、無理にお答えいただく必要はございません。
・調査開始後であっても、調査を中止・拒否することができます。調査開始後に中止・拒否を申し出られたことにより不利益を被ることはございません。

3．調査で使用する機器について

・聴きとった内容はICレコーダーにて録音します。
・調査内容の録音を拒否される場合は、筆記にて記録します。

4．データの利用について

・ICレコーダーに録音した内容は、文字化した後、すみやかに消去いたします。
・ご回答いただいた内容につきましては、個人情報保護法をはじめとする関係諸法令を遵守し、情報の取り扱いについては、鍵のかかる研究室にて、安全・適切に利用保管し、処理させていただきますので、あなた自身が不利益を被ることはございません。

5．調査結果の公表について

・本調査は北九州市立男女共同参画センターの「平成30年度ジェンダー問題調査・研究支援事業」の助成を受け実施します。同センターの「平成30年度ジェンダー問題調査・研究事業報告書」や論文（学会発表資料）にインタビュー内容の一部が掲載される予定です。
・インタビューの内容が報告書等に掲載される場合は、インタビューに回答いただいたご本人が特定されないよう仮名で記載します。内容については、事前にご確認いただき、必要に応じて修正いたします。
・完成した報告書（PDF版）をお手元にお届けいたします。また、全国の男女共同参画センターや関連施設・学会等に配布予定です。

【連絡先】山形大学　小林直美研究室
〒992-8510 山形県米沢市城南 4-3-16　山形大学 工学部 1 号館 305
TEL 0238-26-3356　e-mail:naomi-k@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

上記の趣旨を御理解いただき、調査の実施に御同意いただける場合は、下記に署名をお願いします。

署名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

資料2

インタビュー調査の実施にあたって（オリンピック選手用）

１．調査の趣旨

・この調査は、ソーシャルメディアを利用して、様々な情報を発信しているオリンピアンの方を対象とする調査です。調査の目的は、オリンピアンがどのような情報を、誰に対し発信しているのか、その目的と手段、自他への影響・効果について把握し、マス・メディアの発信するニュース内容と比較することにあります。
・本調査への参加は任意であり、調査対象者には参加を辞退する権利があります。本調査への参加を辞退したことによって不利益を被ることはございません。

２．調査方法

・本調査は、「山形大学 小林直美研究室」が実施します。
・ソーシャルメディアを利用し情報発信を行っているオリンピアンを対象としています。
・「対面聞き取り調査形式」で行います。
・調査にかかる時間はおよそ30分～ 60分です
・調査の実施にあったては研究代表である小林直美が1人で行います。
・プライバシーに関することがらなどについてお伺いする場合がございます。その際、回答したくない、あるいは回答しづらい質問に関しては、無理にお答えいただく必要はございません。
・調査開始後であっても、調査を中止・拒否することができます。調査開始後に中止・拒否を申し出られたことにより不利益を被ることはございません。

３．調査で使用する機器について

・聴きとった内容はICレコーダーにて録音します。
・調査内容の録音を拒否される場合は、筆記にて記録します。

４．データの利用について

・ICレコーダーに録音した内容は、文字化した後、すみやかに消去いたします。
・ご回答いただいた内容につきましては、個人情報保護法をはじめとする関係諸法令を遵守し、情報の取り扱いについては、鍵のかかる研究室にて、安全・適切に利用保管し、処理させていただきますので、あなた自身が不利益を被ることはございません。

５．調査結果の公表について

・本調査は北九州市立男女共同参画センターの「平成30年度ジェンダー問題調査・研究支援事業」の助成を受け実施します。同センターの「平成30年度ジェンダー問題調査・研究事業報告書」や論文（学会発表資料）にインタビュー内容の一部が掲載される予定です。
・インタビューの内容が報告書に掲載される場合は、インタビューに回答いただいたご本人が特定されないよう仮名で記載し、種目名は記載いたしません。内容については、事前にご確認いただき、必要に応じて修正いたします。
・完成した報告書（PDF版）をお手元にお届けいたします。また、全国の男女共同参画センターや関連施設・学会等に配布予定です。

【連絡先】山形大学　小林直美研究室
〒 992-8510 山形県米沢市城南 4-3-16　山形大学 工学部 1 号館 305
TEL 0238-26-3356　e-mail:naomi-k@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

上記の趣旨を御理解いただき、調査の実施に御同意いただける場合は、下記に署名をお願いします。

署名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

資料3

テレビニュース制作者への質問項目リスト

【属性について】
・あなたのお名前と年齢を教えてください
・入社年と、テレビニュースのキャリアを教えてください
・所属している組織と担当（番組）について教えてください

【テレビニュースについて】
・リオオリンピック報道で一番力を入れたことは何ですか
・リオオリンピック開催中やその前後、ブラジルやリオに関するどのようなニュースを取り上げましたか
・オリンピック開催期間中、オリンピックニュースの順番はどのような方針で決めていますか
・オリンピック選手をニックネーム（本名以外）で報じる場合がありますが、どのような時にニックネームを使用しますか
・リオオリンピック開催期間中の視聴率について教えてください
・リオオリンピック時に、それまでの取材方針・体制・技術等に変化はありましたか
・東京オリンピックにむけてどのようにスポーツニュース（競技・選手・関連ニュース）を報じていく予定ですか

【SNS等メディア利用について】
・テレビ局（番組）または記者の公式アカウントで、どのようなソーシャルメディアを利用していますか
・いつから利用し始めましたか
・ソーシャルメディアを始めたきっかけは何ですか
・普段、ソーシャルメディアを使って、どのような情報を週何回発信していますか
・発信する情報や記事、映像・動画は誰が執筆、撮影、編集していますか
・ソーシャルメディアを通じて発信する内容は、誰を対象としていますか
・ソーシャルメディアを利用する目的は何ですか
・テレビ局（番組）または記者の公式アカウントのお気に入り数、フォロワー数を教えてください
・普段、どのような内容（情報、写真、動画）を発信すると反応がいいですか
・リオオリンピック時に、どのような情報をソーシャルメディアで発信していましたか
・テレビニュースとソーシャルメディアの内容では、どのような違いがあると思いますか
・ソーシャルメディアで情報を発信する時、注意していることは何ですか、社内でガイドラインがあるならば教えてください
・オリンピック前後で、お気に入り数、フォロワー数に変化はありましたか
・これから、ソーシャルメディアをどのように利用していく予定ですか

【オリンピック報道とジェンダーについて】
・リオオリンピック時の取材体制（制作者や記者の男女比）について教えてください
・リオオリンピックの選手の取り上げ方（映像やインタビュー内容）について、男性選手と女性選手で相違点はありましたか。
・リオオリンピックでは、多様性を尊重するオリンピックとして、史上最も多くの選手や関係者がセクシャルマイノリティであるとカミングアウトしました。取材したあなた自身、選手の多様性について感じたことはありますか？
・東京オリンピックに向けて、選手の性的指向やエスニシティ、障がいをどのように取り上げる予定ですか
・選手のエスニシティやジェンダー、セクシャリティに関する取材や報道に関し、ガイドラインや倫理規定が局内で定められていますか。

資料4

オリンピック選手への質問項目リスト

【属性について】

・あなたのお名前と年齢を教えてください
・あなたの競技種目と競技歴について教えてください
・現在、所属している組織について教えてください

【SNS等メディア利用について】

・どのようなソーシャルメディアを利用していますか
・いつから利用し始めましたか
・ソーシャルメディアを始めたきっかけは何ですか
・普段、ソーシャルメディアを使って、どのような情報を週何回発信していますか
・発信する情報や記事、映像・動画は誰が執筆、撮影、編集していますか。
・ソーシャルメディアを通じて発信する内容は、誰を対象としていますか
・ソーシャルメディアを利用する目的は何ですか
・あなたのソーシャルメディアのお気に入り数、フォロワー数を教えてください。
・どのような内容（情報、写真、動画）を発信すると反応がいいですか
・あなたが情報を発信する時、注意していることは何ですか
・オリンピックに出場した時、どのような時にソーシャルメディアで情報を発信しましたか
・オリンピック前後で、お気に入り数、フォロワー数に変化はありましたか
・オリンピック時にマス・メディアから取材を受け、報道されたことはありますか
・オリンピック開催期間も含め、あなたがソーシャルメディアで発信した内容を、マスメディアで取り上げられたことはありますか
・今まで、ソーシャルメディアを利用していて良かったことはありますか
・ソーシャルメディアで情報を発信していて、困った事やトラブルはありましたか
・これから、ソーシャルメディアをどのように利用していく予定ですか

【オリンピック報道とジェンダーについて】

・リオオリンピックでは、多様性を尊重するオリンピックとして、史上最も多くの選手や関係者がセクシャルマイノリティであるとカミングアウトしました。参加したあなた自身、選手の多様性について感じたことはありますか
・リオオリンピックで選手の取り上げ方（映像やインタビュー内容等）について、男女の相違を感じたことはありますか
・リオの報道をふまえて、今後、マス・メディアの報道に期待することは何ですか

平成30年度
ジェンダー問題調査・研究支援事業報告書

平成31年3月発行

編集・発行　©北九州市立男女共同参画センター・ムーブ
情報課
〒803-0814　北九州市小倉北区大手町11番4号
TEL/FAX（093）583-5082
https://www.kitakyu-move.jp
e-mail:move@move-kitakyu.jp